

(様式1)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

推進地区名	協力校名	児童生徒数
五條市	五條市立五條小学校	192
	五條市立宇智小学校	137
	五條市立牧野小学校	447
	五條市立五條中学校	118
御所市	御所市立大正小学校	227
	御所市立葛上中学校	66
宇陀市	宇陀市立榛原小学校	303
	宇陀市立菟田野中学校	89

1. 研究課題

(1) 確かな学力育成のための取組の定着

授業や単元全体に見通しをもたせる工夫や、めあてや振り返りを計画的に取り入れる工夫、児童生徒の考えや結果を可視化し思考を深める工夫など、児童生徒の学習意欲を高め、主体的に学ぶ児童生徒の育成を目指し、教員が積極的に授業を改善するための取組の推進を図る。

(2) 主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善における研修体制の構築

「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた学習・指導方法の工夫」を研修テーマとして、教科の枠を越えた授業研究など、全教職員が参加する体制での校内研修の推進を図る。

(3) 家庭や地域との連携を図る取組の充実

基本的な生活習慣、学習習慣の確立・定着には、家庭の理解、協力が不可欠であるとの認識から、家庭・地域と連携した取組をさらに充実させる。また、地域・学校の実情や課題に応じて、学校支援地域本部事業等の活用、大学等研究機関との連携など特色ある取組を進める。

上記(1)～(3)の取組を一層充実・深化させ、学習意欲を向上させるために、さらに以下の点について取り組む。

- ・協力校を中心とした学力向上等の方策の研究及び県内への成果の普及
- ・基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る教材開発
- ・保護者との連携・協力による学習習慣の定着や効果的な家庭学習教材の開発

2. 推進地域の取組状況

(1) 教員の授業力の向上

- ① 学力向上実践研究推進協議会の開催

推進地区に指定した五條市、御所市、宇陀市において、各地区・学校の実態に応じた実践的研究の推進に向けた協議を行った。

・平成29年6月6日（火） 第1回学力向上実践研究推進協議会

・平成30年1月25日（木） 第2回学力向上実践研究推進協議会

各協議会において、推進地域・各推進地区・協力校の取組を報告し、これまでの成果と課題を検証し共有するとともに、今後の研究成果の周知の在り方等について協議した。

② 学力向上支援サイト「まなび一奈良」の活用

分かりやすい授業を行うための教員の指導力向上のための取組として、子どもがつまずきやすい分野を取り上げ作成した小学校国語科、算数科、理科の授業モデルの動画を配信するとともに、校内研修での活用を呼びかけた。

③ 異校種間の円滑な接続を図るための研修の充実

同じ中学校区の小・中学校など異なる校種の教員が共に参加する授業研究等に指導主事を派遣し、校種間での円滑な接続とともに教員の研修機会の充実及び指導力の向上に努めた。

(2) 授業改善における学校全体での研修体制の構築

① 全国及び奈良県学力・学習状況調査の調査結果の活用による指導改善に向けた説明会の開催

本年度の全国及び奈良県学力・学習状況調査の調査結果から明らかになった本県の児童生徒の課題の改善に向けて、9月には市町村教育委員会に対して、10月には教員に対して、指導改善のポイント等についての説明会を開催した。今年度は特に、国語、算数・数学における課題を踏まえ、調査対象学年や教科の教員だけではなく、学校全体の課題として、全ての教科等でその解決を図る取組を考え実行することや、実践を検証し、次につなげるためのカリキュラム・マネジメント及びPDCAサイクルの一層の充実を図るよう指導した。

② 学力向上フォーラムの開催

本年度の学力向上フォーラムを平成30年2月13日（火）に開催した。奈良教育大学教授の小柳和喜雄氏から講演をいただいた後、今後の各校における指導改善の手立てとするため、シンポジウムにおいて各協力校での学力向上のための効果的な取組について協議した。

(3) 家庭学習の推進

① 「家庭学習の手引」の作成、配布

平成28年度に小学4年生とその保護者向けに作成した「家庭学習の手引」について、各学校等からの意見も踏まえ、自ら学ぶ力を育むための学習習慣の形成にはより早い段階からの啓発が必要であると判断し、手引を全面改訂した上で、平成29年度は新しい「家庭学習の手引」を小学1年生とその保護者に配布し、活用を呼びかけた。

② 「自主学習ノート」、「自主学習支援ノート」等の周知

家庭学習の習慣を身に付け、継続して家庭学習に取り組む児童生徒を育成するため、協力校で取り組んでいる「自主学習ノート」や「自主学習支援ノート」の活用について、研究発表会等の機会を通じて県内の各学校に周知することができた。

3. 推進地区の取組状況

(1) 五條市の取組

① 教員の授業力（教師力）向上に向けた取組

ア 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた五條市版「授業プランシート」の活用

昨年度改訂した「授業プランシート」に、課題として挙げられている「正確な理解」に基づいた読みに視点を当てた授業展開を取り入れ、各教科で授業例を作成した。これを活用することが教科の枠を超えた中学校区における研究授業の一助となっている。

イ 学力向上研修会の実施

市内全小・中学校の教員を対象に、学力向上研修会を2回実施した。第1回は、五條市の学力向上の課題と市としての方向性等を全教員に示した。第2回は、国・県・市が行っている、小学4年生～中学3年生までの学力・学習状況調査結果について、専門機関に依頼した分析結果をもとに、教員に取組の成果や課題を示している。

ウ 小中9年間を見通した「つなぐ つながる カリキュラム」の作成・活用

市教科等研究会において作成したカリキュラムを冊子にして各校に配布した。このカリキュラムは、前述の「授業プランシート」と同様、研究授業の際に活用することで、9年間の学びの連続性を意識して授業を行うことの重要性を各校に示した。

エ 市内共有フォルダ「お役立ち情報局」の活用推進

各校の「家庭学習の手引き」「研究授業の指導案」「つなぐ つながる カリキュラム」などを市全体で情報共有するとともに、PC上に共有フォルダを作り、内容の充実を図っている。市内の効果的な取組を共有することで、各校の課題解決に役立っている。

オ 授業力・教師力向上のための「Good Job アカデミー（教師塾）」の実施

授業力や教師力を向上させるため、現場の教員の自主運営のもと、本年度も年間5回の「教師塾」を実施した。本年度は、「道徳の評価や授業作りについて」「自主学習の取組と各学校の交流」「ミドルリーダーの役割について」等の研修を行い、延べ160名の教員が参加した。

② 児童生徒の家庭学習習慣の定着に向けた取組

ア 自主学習ノートを活用した小中連携した取組の推進

課題となっている家庭教育習慣の定着に向け、中学校区における自主学習ノートの活用を核とした家庭学習の推進を図っている。学力向上プロジェクトで作成した「9年間の家庭学習習慣シート」を提案会を設けて示した。シートには家庭学習診断も添付し、学期ごとに保護者や教員が家庭学習習慣の定着の度合いを診断できるようにしている。

イ 保護者啓発パンフレットの配布

全国学力・学習状況調査の結果を分析した結果や「自主学習ノートのすすめ」などを載せた保護者啓発パンフレット「五條市の子どもたちに『確かな力』を育もう」を今年度も作成し、市内保育所・幼稚園・小学校・中学校の全保護者や地域の方々に年度末に配布する予定である。

(2) 御所市の取組

① 児童生徒の学力向上に向けた取組

ア 「御所市 夢・誇り・学びプラン」の実施

「夢・誇り・学びプラン」の推進校である市内各校に、「子どもの考えが深まる」授業づくりのための取組を支援した。また、推進校である市内各校の「夢・誇り・学びプラン」推進担当教員が定期的集まり、情報交換や研修を行った。第2回の会議では、各校及び市教育委員会が行った全国及び県学力・学習状況調査等の結果分析を交流するとともに、今後の取組について話し合った。

イ 学力向上フォーラムの実施

推進校である市内各校の教員が一堂に会し、各校の学力向上の取組と成果と課題を共有し、市全体で学力向上に取り組む意識を高める。本年度は、推進校から2校（県の指定校を除く）と市教育委員会の研究発表、授業力向上サポーターによる実践発表を行い、それを踏まえ、大阪大学志水教授から「『力のある学校』をつくる」をテーマにした講演が行われた。

② 教員の授業力向上に向けた取組

ア 授業力向上サポーター事業の実施

市内小・中学校の教員から授業力向上サポーターを委嘱し、サポーターによる公開授業や授業づくりの支援を行った。

イ 優れた授業実践発信事業

推進校である市内各校の教員の優れた授業実践を収集し、その成果を市内各校の教員に広く発信した。

③ 家庭学習の定着促進事業

ア 「御所市家庭教育の手引き」を作成し、市内小・中学校の保護者に配布し、家庭での学習の協力を促している。

④ 自尊感情、規範意識の向上と集団づくりの推進

ア 中学生キャリア教育推進事業

市内の中学生（1年）が一堂に会し、講演や進路の説明会に参加することで、目標をもって努力する意識を醸成する。

(3) 宇陀市の取組

① 学びの創造UDAプランの推進

ア 「授業をUD化するための視点」リーフレットの作成、配布

昨年度までに市内の学校で取り組んだ授業のUD化の研究成果を市で取りまとめ、「授業をUD化するための視点」として各学校に配布し、授業改善に活用するよう促している。

イ 「授業AL化の視点」の作成、配布

児童生徒が受け身で学ぶのではなく、「分かる楽しさを味わい、積極的に活用する」児童生徒に変えていくことの大切さが実感できるよう「授業AL化の視点」を各学校に配布した。

ウ UDAスタンダードの作成、活用

各学校の授業改善の視点として、「めあて」「話し合い活動」「振り返り」を大切にしていこうことが共通して挙げられている。この3点を中心にして「UDAスタンダード授業観察シート」を作成し、本シートを参考に学校独自の資料を作成するなど、各学校での活用を呼びかけている。

② 宇陀市研修会の実施

本年度、夏期休業中に研修会を実施した。8月1日には、UDAプラン推進目標の周知徹底を図るため、市内全校の全教員を対象に研修会を実施した。また、授業のUD化について学ぶため、8月18日に、「授業のユニバーサルデザインとインクルーシブ教育の考え方と実際」と題して、プール学院大学教授 石塚 謙二氏による講演を行った。授業のUD化は主体的・対話的で深い学びと一直線上にあり教科教育であること、授業をUD化し基礎的環境整備を整えつつ、インクルーシブ教育を推進していくことを教示いただいた。

③ 「宇陀市生活・学習アンケート」による学習状況等の把握

12月中旬から1月中旬にかけて、宇陀市内の児童生徒の学習意欲や学校、家庭での学習状況の変容を把握するため「宇陀市生活・学習アンケート」を実施した。アンケートの内容は、4月に行った市・県・国の学力・学習状況調査の質問項目と同一の項目とした。この結果から、市の取組内容について評価を行い、今後の指導改善に生かしていく。

4. 協力校の取組状況

(1) 五條市立五條小学校

言語活動の充実を通して課題解決を図る授業の工夫について研究を進めた。

① 言語力を高める授業展開

各教科において話し合いや発表の場を積極的に設け、言語活動を充実させることで思考力・表現力についての課題解決を図った。様子を表す言葉や気持ちを表す言葉などをワードウォールにして掲示し、児童がいつでも見られるようにした。全校でノート記述の基本スタイルを統一し、算数の適用問題等で自分の考えを具体的に記述させるとともに、記述図や式、言葉を使って説明する活動を多く取り入れた。

② 朝のパワーアップタイムの充実、五夢りん学びの教室の活用

放課後や長期休業中に「五夢りん学びの教室」を実施。Sプリントの導入で児童個々の学び直しをシステム化した。また、朝の時間を活用して、計算プリントや学年の課題に応じたプリントを使い、基礎基本の力の定着を図った。また、地域ボランティアの活用を積極的に行った。

③ 家庭学習習慣の充実

低学年から系統立てて自ら進んで学習する習慣の確立を目指し、家庭学習の手引きやノートモデルを提示して、家庭の協力を得ながら家庭教育習慣の定着に取り組んだ。

④ 児童への多面的アプローチ「MI（マルチプルインテリジェンス）」「アセス」の導入

早稲田大 本田恵子教授に指導を受け、学校環境適応感尺度「アセス」を導入するなど、多面的な児童理解ができるようにした。また、児童一人一人の得意な知能「MI」に応じた学習支援ができるような授業展開の工夫を行った。

(2) 五條市立牧野小学校

言語活動の充実を通して主体性を育み、学力の向上を図るため、国語科を中心に研究を進めた。

① 伝え合う力の育成

全国学力・学習状況調査の調査結果から「情報の読み取りや活用する力」に課題があることを受け、情報を読み取り活用を図る点を重視した言語活動の充実を図る授業研究を行った。

② 五條市図書館司書と連携した読書活動の推進

読書貯金や家読（うちどく）、図書館司書による国語科関連図書のブックトークや並行読書、絵本の広場などの取組を推進し、読書への意欲の喚起を図った。

③ 自主的に取り組む家庭学習の推進

家庭学習の手引きの活用を図るとともに、自主学習のモデルを提示したりしながら、予習や復習など自主的に学習を進める態度の育成を図った。

(3) 五條市立宇智小学校

自分の考えを伝える力の育成に向け、算数科を中心に見通しと自分の考えをもつことができる授業研究を進めた。

① 「宇智小スタイル」の確立（問題解決型、ねらいを焦点化）

市の「問題解決型 授業プランシート」を参考に授業の流れをモデル化し、「めあて」の掲示、既習内容の掲示、振り返りシートを活用した自己評価を行った。

② 学力の二極化への対策

T Tによる算数科の授業を行ったり、朝の会の後、算数プリントに取り組んだりすることで、基礎学力の定着を図るとともに、学び直しの機会として「サマースクール」を実施した。

③ 「確かな読み」を身に付ける取組の共有化

国語科の力が算数科にも大きく影響することから、国語科の研修で取り組んできた辞書引き学習やメモや要約などに継続して取り組んだ。

(4) 五條市立五條中学校

生徒の学習意欲の向上を図り、主体的・対話的で深い学びにつながる授業改善を目指して研究を進めた。

① 「分かる授業」につながる教員の授業力の向上

ホワイトボードを活用した授業を各教科で積極的に行い、「話し合い活動」による言語活動の充実を図った。また、授業への興味・関心を高めるとともに、生徒が視覚的に学習内容を把握することで理解が進むようICT教育の充実を図った。

② 自主学習ノートの推進

家庭での自学自習を促す手立てとして1日1ページを目安とする自主学習ノートを導入し、全校生徒を対象に取り組んだ。

③ 学習内容の基礎・基本の定着

授業で確認テストを実施し、基本的な学習内容の定着を図った。さらに、休日の土曜を活用して行う取組として2週間に1回をめぐりに「土曜塾」を開講した。

(5) 御所市立大正小学校

国語科を中心に「聴く」力の育成を図りながら、自尊感情を醸成し学習意欲を高める研究を進めた。

① 話し手に体を向ける聴き方のスキルを習得

全職員が「聴く」ことを意識しながら、学級指導や全校集会の場を通して、話し手に体を向け、傾きながら話を聴くことを指導した。

② 国語科を中心にした、聴き合い学び合える授業づくり

県の指導主事や外部講師を招聘し国語科の校内授業研究会を行い、毎時のめあての確認や

学習を振り返る場面など設定する国語科の授業モデルを作り、各学級で実践した。

③ 児童の興味・関心を高めるための授業内容、授業方法の工夫

地域の方や企業に協力を求めながら、地域の野菜づくりや、商業施設での職場体験などの体験的な学習を取り入れた授業を取り入れた。

④ 自己肯定感の向上を図る取組

自分の宝物（写真、賞状、テストなど）をファイリングするための個人ファイルを児童に用意し、ファイルを確認して意欲をもたせる機会をつくった。また、家族や学級の児童からの評価（いいところ）も順次ファイリングしていき、自己肯定感を高める効果を図った。

(6) 御所市立葛上中学校

生徒が見通しをもち、主体的に学ぶための授業づくりをテーマに研究を進めた。

① 授業スタイルの確立（授業におけるめあてと振り返りの徹底）

ホワイトボードなどを活用して「めあて」の提示をした。「振り返り」に関しては、先進校視察なども行いながら、「まとめ」と「振り返り」の違いについて教員間で協議した。

② コミュニケーション能力の育成

「表現力」を育成するという観点から、「ビブリオバトル」についての研修を行い、3学期に実施する予定で取組を進めている。

③ 自主学習支援ノートの改善

生徒の学習習慣の定着に向けて、自主学習支援ノートの内容の改善と有効に活用するためのシステムづくりを検討し、改善して取組を行っている。

(7) 宇陀市立榛原小学校

算数科におけるユニバーサルデザインを生かした授業づくりについて研究を進めた。

① 主体的・対話的な学びの授業づくり

基礎基本の力を付けることを大切にしながら、ICT機器を活用し、ペア学習などを取り入れた授業改善に取り組んだ。

② 研究体制の改善

教員の研修体制に3つの専門部会（調査部会、評価部会、家庭学習部会）を設置し、低・中・高学年の教員がそれぞれの部会で所属して研究を進めた。

(8) 宇陀市立菟田野中学校

生徒の学習意欲を高め、基礎的・基本的な力の定着とともに学習習慣を育成する研究を進めた。

① 学力向上に係る研修の実施

ア 全国及び奈良県学力・学習状況調査の結果を踏まえ、本校の生徒の強みと課題の視点から分析を行った。

イ 国語、数学での課題を全ての教科等につないで、課題を克服するための手立てを全ての教員で協議、実践した。

② 研究授業の実施

校内研修として、公開授業と研究協議を積極的に行った。

③ 家庭学習の充実

生徒が自主的に計画的に家庭学習に取り組むために、教員が協議を重ねながら取組を進め、徐々に成果が見られるようになってきた。

5. 実践研究の成果

(1) 協力校における取組の成果

① 授業力の向上

ア 学習パターンの確立

協力校の多くで問題解決型の学習のパターンの確立や教員全体での共有が見られた。一定の型を示すことにより、教員が研究への見通しをもつことができ、その型の中で教員個々の創意工夫が生まれることを期待した。その結果、めあてと振り返りの徹底、児童生徒が自力で解決を図る場面や交流する場面において、研修を深め授業スタイルを構築する過程を通して、継続的な授業改善を図ることができたと考えている。

イ 司書教諭や学校司書との連携

授業者が司書教諭や学校司書と連携し、学校図書館の活用を促進したり、地域の人的資源を活用して授業を充実させる取組を行ったりすることができた。本の主人公や作者との対話を通じた協働的な学びや、効果的な資料から新たな考えを創造する深い学びにつなげていくことが今後も期待できる。

ウ 交流場面における学習ツールの活用

ICT機器やホワイトボードなどの学習ツールを活用することにより、子どもの思考が可視化され、話合いの論点が明確になるなど、児童生徒が協働的に学ぶ意義を理解し、より実感を伴う深い学びにつながると期待できる。

エ 中学校区での合同研修

全国及び奈良県学力・学習状況調査の調査結果分析を、同じ中学校区の小・中学校の教員が協力して行い、校区内の児童生徒の課題を共有することにより、9年間を見通した計画的・組織的な児童生徒の資質・能力の育成を図ることが期待できる。

② 家庭学習等の推進

ア 「家庭学習の手引」の活用

県や市、また学校独自の「家庭学習の手引」の活用を図るとともに、各地区独自の自主学習モデルを児童生徒と保護者に提示して、家庭における学習内容や学習方法を啓発した。保護者に対して家庭学習の意義を改めて示すことで、家庭や学校外における学習習慣の形成が重要であることを理解してもらうことができたと考えている。

イ 補充学習の充実

放課後や土曜日、長期休業中における学習の場を設定することにより、児童生徒の基礎的・基本的な知識や技能の定着とともに学習習慣の定着を図ることが今後も期待できる。

(2) 実践研究全体の成果

本年度、各推進地区や協力校において、それぞれの実態に応じた実践を積み重ねてきた。各推進地区内の協力校8校のうち4校において、11月～12月に研究発表会を開催した。県内の教員に広く参加を呼びかけ、各協力校の授業や研究発表をはじめ大学教授による講演等、研究の成果と学力向上に関する情報を直接学ぶ機会をもつことができた。各協力校の教員だけでなく、参加した教員にとっても、今後の取組の充実に貢献できたと考えている。

また、各協力校で重点を置いた教科等は異なるものの、それぞれで独自に行ったアンケート調査の結果からは、児童生徒の学習意欲に関して概ね成果が見られた。

教員の指導力向上については、各推進地区や各協力校を中心に、共通の課題意識のもと授業研究等が推進されており、教員の指導力向上に向け取組を進めている。また、学力向上支援サイト「まなび一奈良」の閲覧については、本年度実施したアンケート調査結果によると79.7%の教員が「活用している」と回答している。

家庭学習の推進については、県内の学校や団体からの意見を取り入れ、「家庭学習の手引」を改訂し、平成29年度は小学1年生に配布した。現在、来年度の小学1年生に配布する準備を進めている。また、県の「家庭学習の手引」とともに各推進地区や多くの協力校が作成した「家庭学習の手引」を活用し、保護者や児童に対して家庭学習の内容や方法を提示するなど啓発を行った。

(3) 取組の成果の普及

① 学力向上フォーラムの実施 平成30年2月13日（火）

奈良教育大学教授の小柳和喜雄氏から講演をいただいた後、今後の各校における指導改善の手立てとするため、シンポジウムにおいて各協力校での学力向上のための効果的な取組について協議した。

② リーフレットの作成、配布

本年度は、推進地域による学力向上のための取組の概要を示したリーフレットを作成し、県内各市町村教育委員会、各小・中学校に配布する。

③ 学力向上支援サイト「まなび一奈良」の活用

これまでの学力向上事業の知見を生かした授業モデル動画や、学力フォーラムでの配布資料、また上記リーフレット等、学力向上に関する情報を掲載し、指導主事要請訪問等様々な場で紹介又は視聴し、教員の授業力向上等の手立てとした。

6. 今後の課題

各学校において「目指す子ども像」を実現するには、全国学力・学習状況調査等から見いだされた課題を、当該学年や当該教科だけのものではなく学校全体の課題として捉え、身に付けさせるべき資質・能力を設定する必要がある。それらの資質・能力の効果的な育成には、学年間の縦のつながりと教科等間の横のつながりを踏まえたカリキュラム・マネジメントが重要である。また、実施した取組を定量的に評価、検証して改善を図るPDCAサイクルの充実を図る必要がある。カリキュラム・マネジメント及びPDCAサイクルの充実には、学校全体で課題を共有し、教員が相互に連携を図りながら取り組むことが重要である。このような学校全体での研究体制を構築する意義と方法についての取組が引き続き求められる。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

推進地区名	五條市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

- (1) 教員の授業力（教師力）向上
- (2) 児童生徒の家庭学習習慣の定着

2. 研究課題への取組状況

推進地区の管理職と教員、学力向上プロジェクトメンバーによる、五條市学力向上推進委員会を定期的開催し、学力の分析をもとに、課題解決に向けた方策を協議した。その際、「正確な理解」に基づいた読みができていない現状や、新学習指導要領で求められる児童生徒に付けたい力、今後変わっていく大学入試や高校入試で必要な読む力等の必要性を提示し、取組の方向性を話し合った。

(1) 教員の授業力（教師力）向上に向けた取組

【主体的・対話的で深い学びの実現に向けた五條市版「授業プランシート」の活用】

昨年度改訂した「授業プランシート」に、課題として挙げられている「正確な理解」に基づいた読みに視点を当てた授業展開を取り入れ、各教科で授業例を作成した。このシートの活用が教科の枠を超えた中学校区における研究授業の一助となった。

【学力向上研修会の実施】

市内全小・中学校の教員を対象に、学力向上研修会を2回実施した。第1回目は、五條市の学力向上の課題と市としての方向性等を全教員に示した。第2回目は、国・県・市が行っている、小学4年生～中学3年生までの学力・学習状況調査結果について、専門機関に依頼した分析結果をもとに、五條市のこれまでの取組の成果や課題を示した。誤答を予想して、子どものつまづきポイントを理解した上で授業を行うことの重要性や、機能的な読み方を指示することで「読む力」が身に付くことなど、授業改善に向けた提案や学力調査の有効な活用について市内の教員が共有できる研修を行った。

【小中9年間を見通した『つなぐ つながる カリキュラム（五條市版9年間のカリキュラム）』の作成・活用】

市教科等研究会において作成した標記カリキュラムを冊子にして各校に配布した。このカリキュラムも、前述の「授業プランシート」と同様、研究授業の際に活用することで、9年間の学びの連続性を意識した授業実践を行った。

〈カリキュラムシートの一例（理科）〉



お役立ち情報局 Top 画面

【市内共有フォルダー「お役立ち情報局」の活用推進】

各校の「家庭学習の手引き」「研究授業の指導案」「つなぐ つながる カリキュラム」などを、市全体で情報共有するために、PC上に共有フォルダーを作り、掲載した。市内の効果的な取組を共有することで、各校の課題解決に役立てた。

【授業力・教師力向上のための「Good Job アカデミー（教師塾）」の実施】

授業力や教師力を向上させるため、現場の教員の自主運営のもと、本年度も年間5回の「教師塾」を実施した。本年度は、「道徳の評価や授業作りについて」「自主学習の取組と各学校の交流」「ミドルリーダーの役割について」等の研修を行い、延べ160名の教員が参加した。また、この教師塾は、小中学校の教員の貴重な情報交流の場ともなっている。

(2) 児童生徒の家庭学習習慣の定着に向けた取組

【家庭学習習慣の定着に向けた小中連携の取組】

課題となっている家庭教育習慣の定着に向け、中学校区において、自主学習ノートの活用を核とした家庭学習の推進を図った。学力向上プロジェクトで作成した「9年間の家庭学習習慣シート」を提案会を設けて示した。シートには家庭学習診断も添付し、学期ごとに保護者や教員が家庭学習習慣の定着の度合いを診断できるようにした。

【保護者啓発パンフレットの配布】

全国学力・学習状況調査の結果を分析した結果や「自主学習ノートのすすめ」などを載せた保護者啓発パンフレット「五條市の子どもたちに『確かな力』を育もう」を

今年度も作成し、市内保育所・幼稚園・小学校・中学校の全保護者や地域の方々に年度末に配布する予定である。

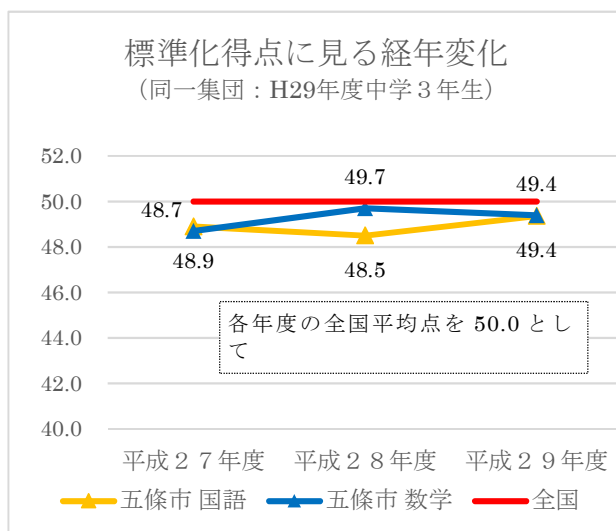
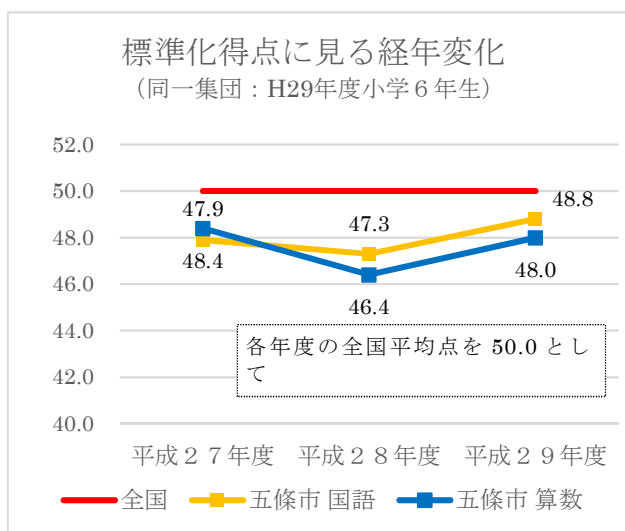
3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 全国、奈良県、五條市の学力・学習状況調査の結果から見える成果

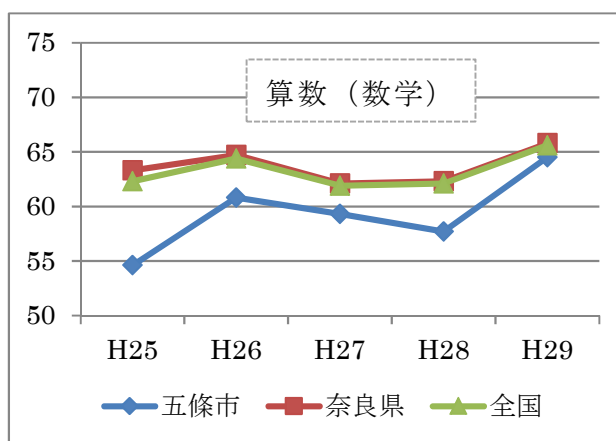
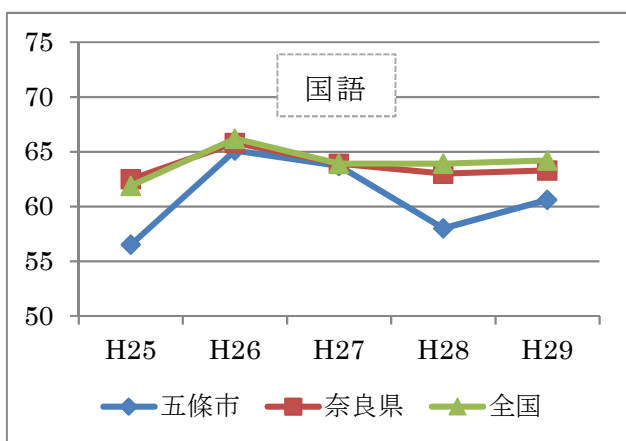
標記調査の結果について、それぞれ同一集団・同一学年による経年変化の比較等を行い、市全体としての取組の成果や課題を把握した。同一集団での経年変化を見てみると、小・中学校ともに年々学力が伸びていることが分かる。とりわけ中学校では、全国平均とほぼ同じ結果になってきており、これまでの取組の成果が見られる。

また、同一学年の平均点を表示したグラフからも、年度によって変動も見られるが、取組を始めた平成 25 年度から徐々に全国平均に近づきつつあることがうかがえる。

標準化得点に見る経年変化（同一集団）



平均点に見る経年変化（同一学年）



各年度の国語 AB、算数（数学）AB を平均して市・県・国の児童・生徒の平均点を表示

また、以下の表は、全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙からの抜粋である。家庭学習習慣については、小・中学校ともに、2年前より家庭学習時間に伸びが見られる。これは、今までの取組の成果といえる。しかし、全国平均と比べると依然として低い数値を示しており、特に中学校でその傾向が強いため、家庭学習の習慣化に向けて継続した取組を行うことが、今後の学力向上につながるものと考えている。

そこで、今年度は中学校区を単位とした学力向上ヒアリングを実施し、9年間を通して家庭学習習慣の定着を図るよう指導した。

【小学校】

	H27 五條市	H29 五條市	全国
学校の授業以外にどのくらい勉強しますか。(1時間以上)	55.6	61.8	64.4
家で、計画を立てて勉強していますか。	53.7	60.3	64.5
家で、学校の宿題をしていますか。	98.1	96.8	96.9
家で、授業の予習をしていますか	37.7	42.3	41.0
家で、授業の復習をしていますか	47.9	57.7	53.8

【中学校】

	H27 五條市	H29 五條市	全国
学校の授業以外にどのくらい勉強しますか。(1時間以上)	65.3	76.4	79.2
家で、計画を立てて勉強していますか。	46.4	44.5	51.5
家で、学校の宿題をしていますか。	82.1	85.2	89.5
家で、授業の予習をしていますか	28.8	23.1	31.7
家で、授業の復習をしていますか	43.1	36.3	50.5

(2) 小・中学校の連携の強化から見える成果

市の教科等研究委員会において、「つなぐ つながる カリキュラム」の作成を行った。この作成を通して「五條市の児童生徒に付けたい力は何か」を話し合うなど、小・中学校の教員が連携し、9年間を見通した指導のポイントについて話し合うことができた。中学校区で行った研究授業の本数は、3年前23回だったものが、本年度は57回と2倍以上に増えた。小・中学校の教員がそれぞれの学校の授業を見ることで、児童生徒の学びや授業形態を知り、授業力向上につながっていると考える。

中学校区における家庭学習習慣の定着に向けた取組は、推進地区を含む中学校区単位で繰り広げられてはいるが、今後は市全体の取組へと広げていきたい。その際、「9年間の家庭学習シート」を活用することが有効であると考えことから、中学校区でシートの活用を図った。

また、「お役立ち情報局」で情報を共有していることも、各校における学力向上の取組に役立っている。

4. 今後の課題

「正確な理解」に基づく読みが、今年度の学力・学習状況調査においても依然として課題である。この課題解決に向けた取組を様々な場で提案し、実践しているところであるが、今後は、取組の成果について中学校区で検証を行う必要がある。

また、課題のある児童生徒に対しては、授業や家庭学習における支援を行ってきたが、依然として学力の二極化が表れている。個々の児童生徒の解答データの蓄積による分析や、それを基にした個々の児童生徒への支援をより一層行っていく必要がある。

また、市独自の指標アンケートを年2回実施しているものの、1回目の結果を有効な取組へと生かしてきれていない学校も見受けられる。全ての学校が、それぞれの課題を意識して、全教職員で取組を進めることや PDCA サイクルを日常的に機能させることなど、継続した指導を今後も行っていきたいと考えている。

(様式2)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

推進地区名	御所市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

「奈良県及び全国学力・学習状況調査の結果分析を踏まえ学習指導の改善を図り、児童生徒の学習意欲を高め、わかる授業、考えを深める授業及び家庭・地域との連携の在り方の創造」

奈良県及び全国学力・学習状況調査の結果分析を踏まえ、本市及び各校の学力向上に係る課題を明らかにするとともに、その課題の共有を図り、学習指導の改善を行うことにより、児童生徒の学習意欲を高め、わかる授業、考えを深める授業を創造するための実践研究及び家庭・地域との連携の在り方を創造するための実践研究を推進し、その成果の普及を図ることにより本市児童生徒の学力向上、自尊感情の醸成等の課題解決に資することを研究課題とした。

2. 研究課題への取組状況

本市では、平成26年度より2年間にわたって、御所市学力向上推進プロジェクト事業を実施し、市教育委員会、市内各小・中学校が共に学力向上の取組を進めてきた。これまでの本市の学力向上の取組と成果及び課題を踏まえ、平成29年度より、御所市 夢・誇り・学びプランを作成し、育みたい4つの力「学ぶ力」「切り拓く力」「関わる力」「自律する力」を明確化した。4つの力を総合的に育成し、学力全体的な向上と低学力層の減少を目標に指標を作成することで、成果・課題の検証を行い、改善につなげる。また、育みたい4つの力の向上及び学力向上を図るために市教委が総合的な事業を実施し、推進校である市内各小・中学校は、市教委の事業等を活用し、自校の状況に合わせた学力向上のステップアップ計画（3ヵ年）を作成（P）し、実践（D）し、検証（C）し、計画改善（A）を行う。

○市教委が実施する学力向上に関する総合的な事業並びに学力を下支えする事業

(1) 基礎学力向上事業

児童生徒の基礎学力の向上のため、漢字検定や役の小角杯（計算力大会）への受検を補助する。

(2) 中学生キャリア教育推進事業

市内の中学生（1年）が一同に会し、講演や進路の説明会に参加することで、目標を持って努力する意識を醸成する。

(3) 授業力向上サポーター事業

市内小・中学校の教員から授業力向上サポーターを委嘱し、サポーターによる公開授業や授業づくりの支援を行う。

(4) ICT授業の推進事業

デジタル教科書やeライブラリー、タブレットの導入を推進するとともに、ICT機器を活用した授業を推進するための研修を行う。

(5) 夢・誇り・学びプラン推進校授業づくり推進事業

推進校である市内各校が取り組む「子どもの考えが深まる」授業づくりのための取組を支援する。

(6) 学力向上フォーラム開催事業

推進校である市内各校の教員が一同に会し、各校の学力向上の取組と成果や課題を共有し、市全体で学力向上に取り組む意識を高める。内容は、推進校より2校（県の指定校を除く）と市教育委員会の研究発表、授業力向上サポーターによる実践発表を行い、それを踏まえ、大阪大学志水教授から『「力のある学校」をつくる』をテーマにご講演をいただいた。学力向上フォーラムでの研究発表2校と授業力向上サポーターによる実践発表を紹介する。



○掖上小学校…研究教科を国語科に設定し、低中高学年部で国語科の授業を公開し、年間を通じて同じ外部講師を招いて研究・研修を実施している。また、朝の学習『すずかけタイム』、放課後の学習『算数チャレンジタイム』等の取組を通して、基礎基本の充実を図っている。家庭学習の充実をめざして『家庭学習の手引き』『家庭学習アンケート』『学習アンケート』等を行っている。4年生で行った県学力・学習状況調査と6年生で行った全国学力・学習状況調査の結果を比較すると、算数A以外で県平均との差が縮まっている。

○名柄小学校…子どもの主体的な学びを育てる授業の創造を研究テーマとして、Skypeを利用した効果的なライブ授業のあり方を研究している。これまで少人数という利点を活かした取組を進めてきたが、少人数ゆえの課題も見られた。その課題を解消するためにSkypeを利用して、遠隔合同授業・バーチャル見学・生きた外国語活動等、効果的なライブ授業を行っている。ライブ授業前後に行った「自分・自分たちの考えや意見を相手に伝えることができた」というアンケート項目で肯定的に答えている児童の割合がどの学年でも高くなっている。

○葛城小学校 中村浩敏教諭（授業力向上サポーター）

国語科における「単元を貫く言語活動」の実践として『ブックガイドタワー』『単元全体の学習計画』『魅力的で明確な学習課題』『自覚的で豊かな交流』『教科書教材で身に付けた力を生かした深い学び』等の取組を行いながら、「国語科における主体的・対話的で深い学びとは」について研究を行っている。その結果、全国学力・学習状況調査の「読むこと」の領域における正答率が県・全国平均よ

り高くなっている。また、「国語の勉強は好きだ」「国語の授業の内容はよく分かる」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う」というアンケート項目で肯定的に答えている児童の割合が年々高くなってきている。

(7) 優れた授業実践発信事業

推進校である市内各校の教員の優れた授業実践を収集し、その成果を市内各校の教員に広く発信する。

(8) 夢・誇り・学びプラン推進担当者会議開催事業

推進校である市内各校の夢・誇り・学びプラン推進担当教員が定期的に集まり、情報交換や研修を行う。第2回の会議では、各校及び市教育委員会が行った県及び全国学力・学習状況調査等の結果分析を交流するとともに、今後の取組について話し合った。3学期には、先進地視察を行い、次年度に向けての方向性を検討した。

(9) 家庭学習の定着促進事業

「御所市家庭教育の手引き」を作成し、市内小・中学校の保護者に配布し、家庭での学習の協力を促す。

(10) 放課後子ども教室・地域未来塾事業

学校・地域パートナーシップ事業を活用し、市内小・中学校において、大学生や地域の方と協働して学習支援等を行う。

(11) その他

スクールカウンセラー派遣事業・スクールソーシャルワーカー派遣事業・適応指導教室開設事業・宝物ファイル（T P F）推進事業・特別支援教育支援員派遣事業・特別支援教育c d連絡会開催事業等を行う。

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 奈良県及び全国学力・学習状況調査等の結果から

奈良県学力・学習状況調査では、大正小学校は算数の正答率が県平均を上回り、国語の正答率（10.7ポイント）でも県平均との差は縮まった。市全体としては、小学校・中学校ともに、平成28年度より県との格差が縮まり、学校間格差も縮まった。小学校算数では県平均まで1.3ポイントとあと少しのところまで近づいている。また、小学校の国語では、言語についての知識・理解・技能が県平均を上回った。

全国学力・学習状況調査では、葛上中学校は数学B以外の正答率が県平均を上回った。市全体では小・中学校ともに県平均を下回ったが、中学校では、国語B、数学A（0.6～1.0ポイント）で県平均との差が縮まった。年度によって多少の変動はあるが、2年間で市教育委員会及び各学校の取組により一定力がついてきているものと考えられる。学習意欲についても、奈良県学力・学習状況調査において小学校で「国語・算数が好きである」の肯定的な回答の割合が県平均を上回り、中学校で「国語が好きである」の肯定的な回答の割合が県平均を上回った。

(2) 学力向上に向けての各校の意識の向上

本事業により、各校が学力向上に係る課題を克服するための実践研究を行うことにより、また、奈良県及び全国学力・学習状況調査等の結果分析を担当者で交流する担当者会議や、学力向

上フォーラムを実施することにより、各校の学力向上への意識の向上が見られる。

4. 今後の課題

本事業による各校及び市教育委員会の取組は4年目を終える。言語についての知識理解、計算力や学習意欲の面で成果が見られるが、本市においては、依然として低学力傾向にある層の割合が高く、学校間格差も大きい。このような課題に各校及び市教育委員会の取組がどれだけ効果があるのか再度検証しなければならない。次年度に向けて、本市の全ての教職員が授業における課題を把握し、授業改善に努め、学力向上に向けての意識を有し、オール御所で取り組めるような体制を御所市 夢・誇り・学びプランの各事業を通して、市教育委員会として構築していかなければならない。

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【推進地区】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

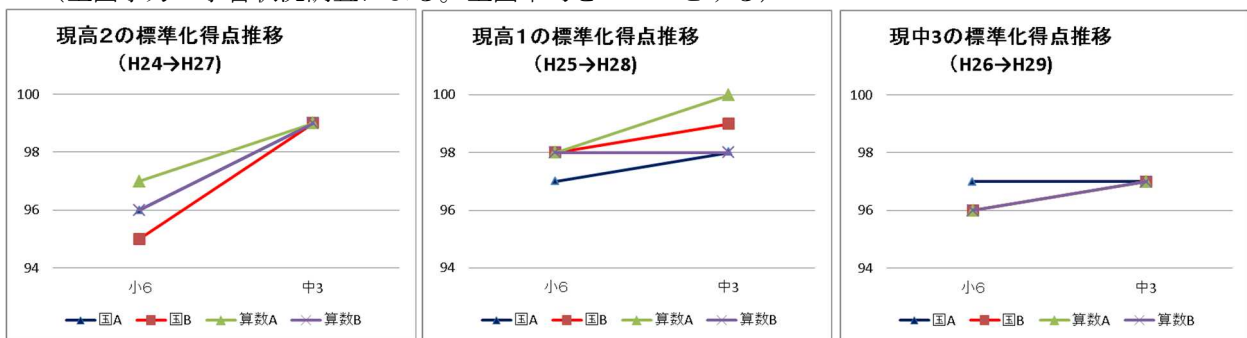
推進地区名	宇陀市
-------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

宇陀市内の児童生徒の学力は地域によって違いがあるものの、全体的に課題があると言える。全国学力・学習状況調査等の指標では、同一集団を年ごとに追うと、小学校段階では全国をやや下回るものの中学卒業にかけて全国平均にかなり近付いている。市全体を通して以下のような共通の課題を認めている。

(全国学力・学習状況調査による。全国平均を100とする)



(1) 全国学力・学習状況調査 国語、算数・数学 調査問題からの考察

- ① 基礎・基本の定着に課題が見られる。
- ② 目的や意図に応じて複数の「記述」「グラフ」「表」などから適切に情報を選択する力に課題がある。
- ③ ②に付随して、根拠を明確にして自分の考えを表現することに課題がある。
- ④ 記述問題（書く力）に課題があり、無解答率が高い。

(2) 児童生徒質問紙調査からの考察

- ① 国語科に関する意欲は高いが、算数科に関する意欲は低い。
- ② 家庭学習で宿題はしているが、予習・復習など自主的な学習に課題がある。
- ③ 「自分にはよいところがある」(自尊心)が全国平均に比べて低い。(小8.7%、中6.7%)

(3) 学びの創造UDAプラン推進委員会を基盤とした取組

宇陀市の学力向上の取組は、UDAプラン推進委員会を基盤としている。この推進委員会には、幼稚園から中学校までの教員が参加しており、教員のまとまりがよい点が宇陀市の強みである。幼・小・中が一貫した取組をすることが可能である。この推進委員会を中心に校長会、教頭会、各教科研究会等と共に取組を展開していきたい。

【重点課題①】教員の指導力向上（次の2つの視点をもって進める。）

- ・分からない児童生徒、できない児童生徒、困った児童生徒の立場に立った学習、児童生徒指導（UD化）
- ・主体的・対話的で深い学び（AL化）

本市は昨年度授業のユニバーサルデザイン化（以下「UD化」）を進めてきた。分かる授業づくり、より良い教員の行動のエビデンスを授業のUD化（特別支援教育の知見）を求めたものである。協力校の取組も影響し、多くの学校で研修が進められている。今年度は、各校の授業システムとして共通理解して取り組むことが決まっている。

また、学習状況調査では、話合いや発表、あるいは自分の考えを伝えるという項目で小・中学校とも全国平均より低い結果であった。児童が主体的に考え、伝え合う学習は学力や意欲等とも関連が指摘されている。

【重点課題②】家庭学習の充実（具体的、継続的な指導）

- ・昨年度は、県の方針を参考に、市として「家庭学習の手引き」を作成し、幼・保・小・中の保護者に配布した。（幼・保は「家庭でのお約束7か条」）本年度は各学校の「家庭学習のきまり」を作り、具体的かつ継続的な指導をしてもらうよう依頼している。それが本格化する本年度、取組がより充実するよう市として働きかけていく。

(4) 低学力の児童生徒への支援、規範意識の向上、幼・小・中連携

- ・宿題の出し方の工夫、学期末の復習の重視（小学校）、放課後学習会、土曜塾（中学校）、長期休業中の補習等、できるところを各校に取り組んでもらう。
- ・学習規律を徹底し、規範意識を高めることを授業やそれ以外の場面で充実させる。
- ・目指す子ども像を共有する、幼小、小中間の連携を推進する。

(5) 各学校が各種学力調査の分析に基づいたP D C Aサイクルを回す。

2. 研究課題への取組状況

(1) 協力校への指導・助言状況

榛原小学校へは市の指導主事が校内研修で「全国学力・学習状況調査算数B問題の分析と授業づくり」というテーマで研修を行った。また、公開研究授業への指導助言を行った。

菟田野中学校へは、校内研修の指導助言を2回行った。。

(2) 学びの創造UDAプラン2年目の推進目標

宇陀市の学力向上は「学びの創造UDAプラン」として推進している。推進目標は（1）指導者の指導力の向上、（2）学ぶ意欲の向上、（3）家庭学習の充実としているが、本年度は重点目標を特に①授業のUD化、②主体的・対話的で深い学び、③家庭学習の充実を重点項目として実施した。最もねらいとしているところは、教員の指導力向上と、学力調査等エビデンスに基づいた学校独自でのP D C Aサイクルを回してもらうことである。

① 平成28年度を取組をまとめた冊子の作成、配布

各小・中学校及び園所における学びの創造UDAプラン1年目の取組内容を、レポートにまとめて提出してもらった。交流のために冊子にまとめ、各所属に配布し参考にしている。今年度も引き続いて作成する予定である。

② 宇陀市版「授業をUD化するための視点」リーフレット作成、配布

良い授業、分かりやすい授業のポイントは、一教員、一指導主事の主張や思いだけではなく、エビデンスをもって説明していかなければ、市としての広がりやまとまりを得られないと考えた。授業のUD化は特別支援教育の視点から、有効性を説明できる。また、UD化の視点によって無駄がなく焦点化された授業は、主体的・対話的で深い学びへしっかりとつながっていく。昨年度までに市内の学校で取り組まれた授業のUD化の研究成果を市で取りまとめ、「授業をUD化するための視点」として、各学校へ配布し、授業改善の視点等に活用してもらうよう依頼した。

③ 宇陀市版「授業AL化の視点」作成、配布

「教師にしっかり説明されて、受け身的に学ぶ」児童生徒の姿から、「分かる楽しさを味わい、積極的に活用する」姿へ変えていくことの意味に気付いてもらうため、宇陀市版「授業AL化の視点」を作成し各学校へ配布した。

④ 学びの創造UDAプラン第1回推進委員会

5月19日、UDAプラン推進委員会を、各校の研究主任を集めて開催した。ここでは以下の点を説明した。

- ア UDAプランの推進目標が、学力・学習状況調査の分析から作られていること
- イ 各学校の学力・学習状況調査の分析を行い、PDCAサイクルを回す必要性
- ウ 各学校に依頼する取組内容（以下の1項目以上について取り組む）
 - ・授業のUD化
 - ・授業のAL化
 - ・家庭学習の充実（各学校の手引き等の作成）

⑤ 学びの創造UDAプラン各校推進計画の提出

UDAプラン重点目標に従って、各校が推進計画を設定した。

⑥ 宇陀市研修会の実施

宇陀市は独自の研修を開催しているが、UDAプランに沿った内容も開催している。本年度は夏期休業中に研修会を実施した。UDAプラン推進目標の周知徹底を図るため、8月1日には市内全校の全教員を対象に研修会を実施した。「子どもに力をつける主体的・対話的授業づくり」と題して、算数・数学科について学校教育課の椿本課長補佐、国語科教育研究所の東畠係長を講師に招き研修を行った。主体的・対話的という意味での授業改善の具体例は大変参考になり、また、ペア学習・グループ学習で対話させる上でのポイントをわかりやすく説明いただいたと参加者に好評だった。

授業UD化について学ぶため、8月18日には「授業のユニバーサルデザインとインクルーシブ教育の考え方と実際」と題してプール学院大学教授 石塚 謙二氏に講演をしていただいた。ここでは、授業UD化は主体的・対話的で深い学びと一つの直線上にあり教科教育であること、授業をUD化し基礎的環境整備を整えつつ、合理的配慮を投入しインクルーシブ教育を推進していくことを教えていただいた。宇陀市の取り組みに理論的な裏付けをいただけたと認識している。

⑦ UDAスタンダードの作成

授業について研修を進めていく上で、市内の教員が共有できるモデルを作りたいと考えた。そこで夏期休業中に各小中学校の教頭にアンケートを実施した。内容は、学力・学習状況調査等の各学校の課題分析と改善点についてであった。それをまとめた結果、各学

校の授業改善の視点として「めあて」「話し合い活動」「振り返り」を大切にしていけることが共通項として挙げられた。その3点を中心にして「UDAスタンダード授業観察シート」を作成した。これを校長会、教頭会、推進委員会などで紹介した。ある中学校では、互いの授業を見て研修するため、学校独自で授業観察シートを作成していた。UDAスタンダードを活用したり、これを参考に学校独自のものを作成したりするなど、研修する際の視点として、各学校での活用を呼びかけている。

4. 実践研究の成果

(3) 〈宇陀市〉 (小学校全6校 中学校全4校)

- ①目標に明示して授業のUD化に取り組む学校 小学校4校 中学校3校
- ②主体的・対話的な学びとして授業改善を進める学校 小学校3校 中学校2校
- ③家庭学習の手引き等を作成し、学校として改善に取り組む学校
小学校3校 中学校4校

④昨年度と本年度の学力調査の結果の伸びを、全国平均との差で見ると

宇陀市全体の現小学校5年生は、国語+4.9ポイント 算数-2.4ポイント
宇陀市全体の現小学校6年生は、国語+4.1ポイント 算数+1.3ポイント
宇陀市全体の現中学校1年生は、国語+2.4ポイント 数学+3.8ポイント
宇陀市全体の現中学校2年生は、国語+1.6ポイント 数学+4.7ポイント
宇陀市全体の現中学校3年生は、国語-0.5ポイント 数学+0.9ポイント

と、概ね前年度より伸び見られる。

- ⑤ 12月中旬から1月中旬にかけて、宇陀市内の児童生徒の学習意欲や学校、家庭での学習状況の変容を把握するため「宇陀市生活・学習アンケート」を実施した。アンケートの内容は、4月に行った市・県・国の学力・学習状況調査の際実施した質問項目と同一の項目とした。この結果、家庭学習については、4月の調査と比較すると学年によってばらつきはあるが全体的に学習時間が増えている傾向は見られる。ただ、学校の宿題はほとんどの児童生徒が家で行っているが、予習、復習をしている児童生徒の割合はどの学年においても今回の調査では半数に満たない。自分で計画を立てて勉強をしているという回答も、4月調査に比べて低下しており、自分で計画を立てて学習することを習慣化させて、この割合を奈良県平均、全国平均に近づけていくことが課題である。

授業については「自分の考えを発表する機会がある」「話し合う活動をしている」「目標を提示している」の項目に対して、肯定的な回答の割合がほぼ8割を超えているが、「振り返り」に関しては少し低い。小学校では60～70%であるのに対し、中学校では50%近くまで下がっている。このカテゴリに関しては、中学校1年生における4月調査と12月調査に大きな変化(低下)が見られた。これは小学校の学習スタイルと中学校との学習スタイルの変化と考えられる。

5. 今後の課題

- (1) 小学校における家庭学習習慣づくりの一層の充実及び小中で一貫した学習習慣づくり
全国学力・学習状況調査では、宇陀市の家庭学習時間が全国平均を大きく下回る状況が続いて示されている。その要因は様々であろうが、宇陀市では地理的要因で通塾率が低いこと、また、家庭的環境の要因も考えられる。これらの点から学力定着についての学校への一層の役割が求められる。そのため、2か年にわたり各学校で家庭学習の習慣づくりに取り組んできたが、それを具体的、継続的な取組としつつ各校の交流を図りながら取り組んでいかなければならない。また、中学校区が共通理解した上で一貫した家庭学習習慣づくりに向けて動きを具体化させることが次の課題と考える。
- (2) 小・中学校における、放課後等の個別指導の充実と働き方改革との兼ね合い
学校は家庭学習への指導、支援を行っているが、家庭環境などの影響により家庭で学習しにくい児童も一定数いる。その児童に対して、学校は休み時間や放課後を使って教員が献身的に指導している。しかし、現在の宇陀市内の小学校の多くがスクールバス通学であり、放課後残しての指導が現実的に困難である。個別の指導を要するこれらの児童にいかに対応するかが困難な課題である。
- (3) より低学年での基礎学力の一層の定着
全国学力・学習状況調査等の指標について、同一集団を年ごとに追うと、小学校段階では全国をやや下回るものの中学卒業にかけて全国平均に近付いてきている。小学校段階でもう少し学力の定着が見られれば中学校卒業段階の学力に変化が見られるものと予想する。より低学年での学力定着を図るため、小学校での学力定着と、幼少連携の中で幼児教育の見直しを進めているところである。
- (4) 中学校における教科横断的な授業研究の推進
部活動指導や教科担任制によって、中学校での授業研究の推進は課題であったが、各学校の努力と工夫により徐々に改善を見ている。今後一層の充実と小・中学校が連携した授業研究を進めていきたい。
- (5) 「宇陀市生活・学習アンケート」での継続的な学習状況の把握
「宇陀市生活・学習アンケート」によって、4月の各種学習状況調査と合わせて、児童生徒の学習状況をより詳しく把握できる。家庭学習や学習への意欲向上等、児童生徒の学習状況の向上を図るため、この結果を指標にしていきたい。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	五條市立五條小学校
------	-----------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

H25年度算数科を中心とした学力向上研究により、課題解決型学習の流れが授業パターンとして定着し、子どもたちの活動がスムーズに行われるようになった。昨年度は全国学力・学習状況調査B問題を意識し、話合いや発表の場を積極的に設けて言語活動を重視した授業展開に力を入れたことで、自分の考えや思考の道筋を言語化し、順序立てて説明できる児童が増えてきた。

また、個別のプリント学習によって児童の到達度を客観的に捉えられるようになり、学習への意欲付けと学び直しの機会として効果的であった。更に家庭での自学自習を習慣化させるため、ノートモデルを示した「自主学習の手引き」を家庭に配布し、保護者の理解と協力を得ながら定着への取組を進めているところである。しかし、様々な取組は学力の比較的高い児童には大きな効果があるものの、低学力の児童へのアプローチが薄いのではないかという意見が教員の中で挙げられた。依然として課題となっている学力の二極化に対し、低学力の児童に焦点を当てた取組にも力を入れていきたい。

2. 協力校としての取組状況

互いの考えを練り上げながら話合いの質を高めていくためには、児童の「読解力」「表現力」の向上が必要である。また、文章や問題を読み解いたり、自分の考えを相手にうまく伝えたりすることに課題が見られる原因の一つは、児童の語彙力の弱さであると考えられる。そこで、今年度は研究主題を「自ら学び、共に高め合う児童の育成～言語力を高め、表現力の向上へつなげる指導の工夫を通して～」として設定し、以下の3つの仮説を立て実践・検証を行うことにした。

仮説1：各教科・領域を通して、言語力を高める授業展開や指導を充実させれば、児童の表現への自信が高まり表現力が向上するだろう。

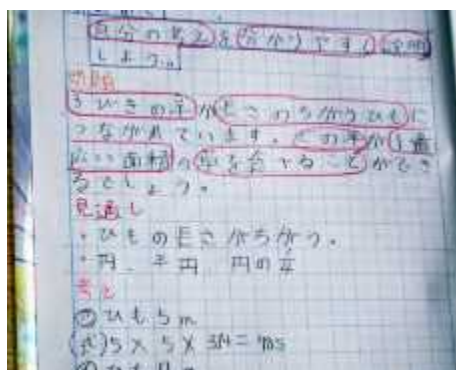
仮説2：課題をもつ児童を把握し、個に応じた指導と基礎基本の力をつけることで、二極化を是正し、底上げを図ることができるだろう。

仮説3：低学年からの家庭学習の習慣化と高学年での質の高い家庭学習を充実させれば、学習意欲を高め、学力の向上につながるだろう。

(1) 仮説1より、言語力を高める授業展開

本年度の全国学力・学習状況調査からも、読解力（問題文を読むことを含む）、本質・概念の理解、身近な物の量の推察、活用する力、自分の考えを説明すること等が弱く、やはり言語

力に課題があることが明らかになった。そこで、次のような項目に留意して授業改善に取り組んだ。



- ・冒頭にめあてを示し、学習内容を児童に意識づける。
- ・正確な読みができるようキーワードに丸をつける。
- ・事前に見通し、事後に振り返りの活動を行う。
- ・児童間で考えを練り合う場を設定する。
- ・積極的な机間巡視でつまづいている児童を支援する。
- ・考える時間、話し合う時間等、学習場面ごとに時間制限を設定して切り替えを行う。
- ・ICTを活用し児童の理解度や興味関心を引き上げる。

- ・様子や気持ちを表す言葉などをワードウォールにして掲示し、いつでも見られるようにする。
- ・様々な教科で辞書活用の充実を図る。
- ・ノート記述の基本スタイルを統一し、考えの場面や適用問題等で考えを記述したり、図や式を使って説明したりできるようにする。

これらに加え、教科にかかわらず基本的な授業中の学習規律を大切に、取組を進めた。



(2) 仮説2より、朝学習の充実、五夢りん学びの教室の活用

学力診断テスト等の結果から、学級ごとの課題のある児童の把握を行い、朝学習時に課題に応じたプリントで基礎基本の充実に取り組んだ。放課後や長期休業中には「五夢りん学びの教室」を実施。児童個別の学び直しができるようにした。また、地域ボランティア等の協力を得ながら、つまづきのある児童の支援や放課後学習サポートの一層の充実を図った。

(3) 仮説2より、多面的アプローチ「MI (マルチプルインテリジェンス)」「アセス」導入

早稲田大学の本田恵子氏指導の下、学校環境適応感尺度「アセス」を導入し、多面的な児童理解ができるようにした。また、児童一人一人の得意な知能「MI」に応じた学習支援ができるような授業展開の工夫を行った。

(4) 仮説3より、家庭学習習慣の充実

低学年から系統立てて自主的な学習習慣の確立を目指し、家庭学習の手引き、ノートモデルを提示して、家庭の協力を得ながら充実に取り組んだ。また、普段の学習とリンクできるようなテーマや課題を設定させ計画的に自主学習ができるようにした。

(5) 中学校区合同研修の実施 (年3回)

中学校区 (中1校・小2校) でそれぞれの全教員が参加して研究授業を実施し、交流することで、9年間を見通したカリキュラムや家庭学習等について研修を深めた。

3. 取組の成果の把握・検証

- (1) 言語力を重視した授業展開の成果として、自分の考えを順序立てて説明する力が付いてきた。また語彙力が付いてきたことで、別の言葉で分かりやすく言い換えたり、一つの物事を様々な言葉で表現したりしようとする児童の姿が見られるようになってきた。話合いの場面も授業の流れの中に位置付けられ、パターンとして定着したことで児童のスムーズな活動が見られるようになった。児童アンケートの結果では、「授業が分かりやすい」との回答は約85%で、

「よく分からない」とする回答は昨年の7%から5%へと下がり、二極化の解消に向けて、若干のボトムアップが図られたと言える。

(2) パワーアップタイムやSプリントによって、どこでつまづいているか、個別の課題を把握し、対策を具体化することができた。児童自身も到達度を客観的にとらえられるようになり、学習の意欲付けとなっている。また、MIによってそれぞれの児童の特性が明確となり、例えば“音楽・リズム”が秀でた児童がリズムに乗って計算をすることで点数が上がるなど、得意分野を生かした学習方法を見付けていく手がかりを得ることができた。こうして掌握した個々へのアプローチを踏まえて授業研究に取り組み、研修を一步進めることができた。

(3) 低学年も無理なく自主学習ノートに取り組めるようになってきた。昨年は調べ学習が多かったが、今年度は加えて予習や復習に重点的に取り組む児童が増え、高学年では自分自身の弱い部分や課題を把握した計画的な学習が増えてきた。また、階段や廊下、各教室に児童のノートを展示したり、通信等を活用した保護者への発信を行ったりすることで、一層意欲的に取り組めるようになった。更に、「元気アップ週間」として家庭での生活習慣チェックを年間7回実施し、家庭での様子を把握するとともに、集約結果を保護者へフィードバックしたり、高得点の児童を表彰したりすることで、生活を整える意識付けにつなげている。

4. 今後の課題

(1) 課題解決型の授業展開や解決の場面での話し合い活動の取り入れなど、授業スタイルは確立することができたので、それらをベースにしながら学年に応じた指導ができるようになってきた。しかし言語力の向上は低学年からの積み重ねが重要になってくるので今後も引き続き積極的な取組が必要になってくる。児童の言語力、表現力が向上することで昨年度課題に挙げていた話し合いの質も上がってくると考える。児童同士で練り上げていけるような話し合いができるよう、言語力を上げる取組をしつつ各教科等で話し合い活動を取り入れていきたい。

(2) 今年度も課題児童に対して、授業中への支援や、放課後の五夢りん教室等で苦手部分を克服できるようアプローチしてきたが、依然二極化は課題である。個々への支援はもちろんのこと、根本となるのは教師の授業力、授業改善にある。児童が解いてみたい、考えてみたいと意欲が出るような授業、教材研究を学校全体で取り組んでいきたい。本年度取り入れたMIがその手がかりの一つとなると考える。一斉指導と個々の特性を生かした支援とをどのように整理し、授業を組み立てていくか、今後の大きな研究課題である。

(3) 今年度様々な取組をする中で、言語力を向上させるだけでなく、「読解力」も重要だということも感じた。資料や文章を読み取る力も大切だが、そもそもの文章を正確に読むという力が不十分な児童も見受けられる。読解力にも目を向け取組を行っていく必要がある。

(4) 家庭学習では、質の高い自主学習ができるよう、また9年間を見通して中学校へつないでいけるよう低学年からの積み重ねが重要になってくる。来年度も引き続き家庭学習の習慣に向けて取り組んでいきたいが、その内容においても課題のある児童に目を向け、意欲をもたせるようなアプローチをしていきたい。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
協力校名	奈良県五條市立宇智小学校		

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

これまでの本校の全国学力・学習状況調査の結果は、国語科、算数科ともに全国平均にほぼ近い正答率で推移している。しかし、算数B問題に弱さが見られ、今までは全国平均を下回っていた。そのため算数科を中心として筋道を立てて体系的に考えたり、論理的に説明したりする力の向上を目指した研修を進めた。また、家庭学習においては、自分で計画を立てて学習を進めるだけの主体性が身に付いていない。このことが、基礎学力の充実や学力の二極化といった課題につながっていると考え、家庭学習習慣の定着に向けた取組の推進に努めた。

2. 協力校としての取組状況

これらの課題と現状を踏まえ、研究主題を『自ら考え、いきいきと伝え合う児童の育成 ～子ども自身が見通しと自分の考えがもてる算数科の学習を通して～』とし、次の3点を中心に取り組んできた。

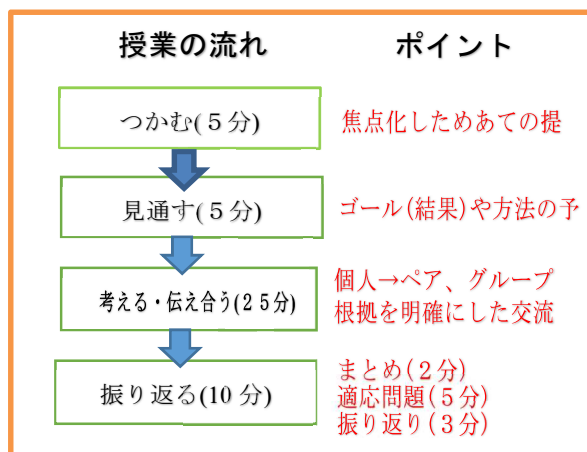
①授業力の向上 ②学習意欲の向上 ③家庭学習習慣の定着

本校では、全教員で全国学力・学習状況調査にチャレンジし、結果を分析して課題を確認し合うとともに、改善に向けて児童に付けなければいけない力の共有化を大事にして、授業力と学習意欲の向上に取り組んできた。

(1) 算数科を中心とした授業改善と授業力の向上
(論理的に説明できる力を育てる問題解決型)

①「宇智小スタイル」の確立(ねらいを焦点化)

授業の流れのモデル化をして授業改善に取り組んだ。「付きたい力」のポイントを押さえた授業が展開でき、授業力のレベルアップを図ることができた。また、授業の流れを示したカードを黒板に掲示して可視化しておくことで児童も見通しをもって学習活動を進めることができた。



②「小学校若手教員育成システム開発事業」による研修

若手教員(2年目の教員対象)の指導力向上に向けた育成研修モデル事業の拠点校の指定を受け、若手教員だけでなく本校の校内研修も兼ねて取り組んだ。教材研究の方法やグループ学習の在り方等について、奈良教育大と教育研究所の先生方から指導助言を得ることができ、全教員の授業力の向上にもつなげることができた。

(2) 学習意欲の向上を目指して

①「うち学」(自主学習)の推進

学校全体で「うち学」の取組を推進するとともに以下のよう「うち学集会」等を計画的に取り入れた。

- ・うち学ノートタワー
- ・うち学集会
- ・うち学ノート交流
- ・うち学週間
- ・「うち学のやり方・付けたい力」の共有化(教室掲示等)

うち学ノートの交流

うち学ノートタワー
200冊を超えた

* 家庭にも「うち学で付けたい力」等を積極的に配布することを通して連携の強化を図った。

②おもしろ算数広場

算数科へのハードルを下げ、遊びながら楽しいと感じることができるきっかけをつくる場として空き教室を利用して「おもしろ算数広場」を設置した。学習ボランティアの支援も得ながら活動することにより算数を身近に感じ意欲を高める活動に努めている。

③「分かった」「できた」と感じる機会づくり

ア きめ細かな指導の充実

算数科を中心に可能な限りT T体制となる工夫をして、低学力傾向児童への支援を行った。このことは、基礎基本の充実につながり、学力の二極化改善に効果的であった。

イ 「かがやきタイム」と「がんばりタイム」

学級の朝の会の後(10分間)の「かがやきタイム」やクラブ活動のない月曜日の6時間目を活用した「がんばりタイム」に、T T体制で算数プリントに取り組んで基礎学力の定着を図った。時には児童の実態に応じて文章題も取り入れた。

ウ サマースクール

低学力傾向にある児童の学力補充を目的に、サマースクールを夏期休業中の12日間を使って実施している。本校児童の課題となっているコースを5つ作るとともに、ボランティアを多く募ることで、丁寧に個別指導ができた。



サマースクールの様子

(3) 家庭学習習慣の定着を目指して

①うち学通信・家庭学習の手引き

家庭学習のヒントやポイント、おすすめの本の紹介等、家庭学習への啓発に活用している。また、「うち学」(自主学習)のやり方と「家庭学習の手引き」の内容についても再検討し、家庭に配布をして、家庭学習の定着に向けての理解と協力を求めた。

②すこやかチェック

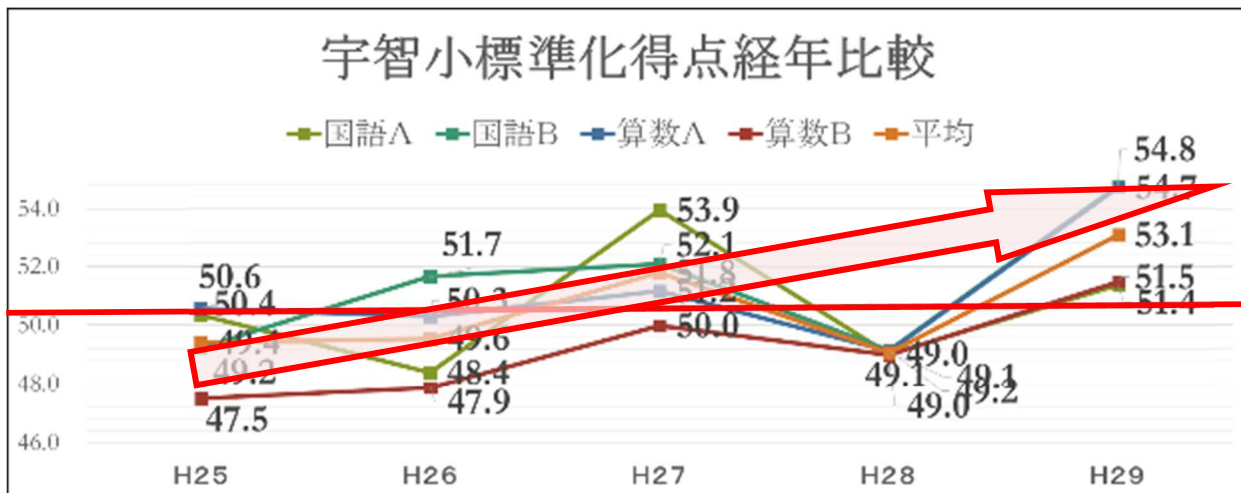
良い生活習慣の定着に向けて学期に1回、「すこやかチェック」(生活アンケート)に取り組んでいる。保護者にも児童の家庭での過ごし方に目を向けてもらう機会としている。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 学力・学習状況調査より

今年度までの全国学力・学習状況調査の算数科における全国平均を50とした標準化得点経

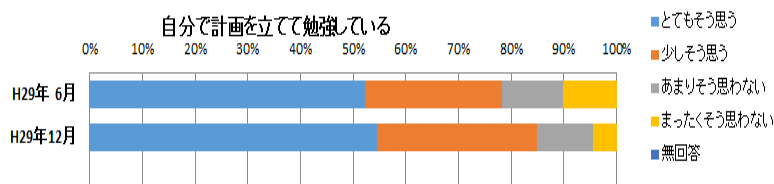
年比較のグラフを見ても全体的に学力の向上が見られ、課題となっていた算数B問題も全国と比べて1.5ポイント上回る結果が得られた。今までの取組の成果が徐々に表れてきたと考える。



(2) 学習意欲の向上

うち学について、各学年に応じた目標をもたせ、継続して取り組んできたことによって、自分で課題を見つけて計画的に学習を進める児童が増えてきている。全国学力・学習状況調査の児童質問紙で「自分で計画を立てて勉強している」の質問に対して肯定的な回答をした児童は83.3%で全国平均と比較しても19ポイントほど高く、市の児童アンケートの結果からも6月と12月では6ポイント上昇している。

うち学に意欲的に取り組むことで家庭での学習時間が増え、家庭学習習慣の定着につながってきている。



(3) 家庭との連携の成果

「すこやかチェック」の結果から、5・6年生の決められた学習時間に取り組んだと回答した児童の割合が、今年度は平成27年度より24.1%も増えている結果が見られた。これらは、学習意欲の向上と、自主学習に力を入れて取り組んだ成果が出ていると思われる。「すこやかチェック」でより良い生活習慣に向けて本人と家の人の意識化ができることは家庭との連携を高めていくのに有効であり、学力の向上にも効果的であった。

4. 今後の課題

○授業力の更なる向上

授業のモデル化についてはある一定の定着が見られるが、本時のねらい（付きたい力）に迫る対話を重視した協働的学びを促す指導の在り方等について今後も研究していく必要がある。

○二極化の対策に向けた基礎学力の定着

今後はこれまでの取組を継承しつつ、家庭でのより良い生活・学習習慣の改善ができるよう、家庭との連携も更に図っていく必要がある。

○中学校区学力向上推進委員会

9年間を見通した取組を推進させるためにも、今後一層連携を図る必要がある。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	奈良県五條市立牧野小学校（小学校）
------	-------------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

全国学力・学習状況調査の児童質問紙において、以下の項目が、低い傾向にあった。

国語の授業において

- ・ 目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりしている。
- ・ 意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している。
- ・ 自分の考えを書くとき、考えの理由が読み手に伝わるように気を付けて書いている。
- ・ 文章を読むとき、段落や話のまとめりに内容を理解しながら読んでいます。

上記の課題を解決するため、国語科を中心とした「伝え合う力を高める」ことを切り口に、「単元を貫く言語活動」に焦点を当てて、本校の課題解決に向けた研究を進めた。

2. 協力校としての取組状況

(1) 課題解決に向けた研究（平成29年度）

- 4月11日 授業方法研修 本校の授業モデルの学び合い
- 5月17日 「単元を貫く言語活動」について基礎からの研修
- 6月14日 1～3年公開授業、研究討議
1年「おおきなかぶ」2年「お手紙」3年「ゆうすげ村の小さな旅館」
- 6月28日 4～6年公開授業、研究討議
**4年「いろいろなふね」5年「新聞記事を読み比べよう」
6年「投書を読み比べよう」**
- 11月17日 研究発表会
- 2月14日 研修総括

(2) 「単元を貫く言語活動」を活用した授業改善

先述した本校の課題を解決するため、以下の手順で授業改善を行った。

- ① 現在までに身に付けてきた力を整理する
- ② 本単元で付けたい力を明確にする
- ③ 付けたい力にぴったりの言語活動を選ぶ
- ④ 「主体的」な学びのために、言語活動を単元を貫いて位置付ける
- ⑤ 「対話的」な学びのために「相手意識」と「目的意識」を大切にさせる
- ⑥ 各教科の学習で確かな読む力を育てる
- ⑦ 家庭学習で基礎的な力を育成する

(3) 「自ら本に手を伸ばす子どもを育てる」取組

「読む力」を付けるためには、読書意欲を高め、読書量の増加と質の向上を図ることが必要であると考え、「自ら本に手を伸ばす子どもを育てる」ことを目指して取り組んできた。

- ① 読書環境の整備・充実
 - ア 学校図書館の整備 イ 学年の読書スペースの設置
- ② 読書活動の推進
 - ア 国語科の授業 イ 家読の推進 ウ 図書委員会の活動 エ 絵本の広場の開催
- ③ 公共図書館司書・図書支援員・保護者ボランティアとの連携

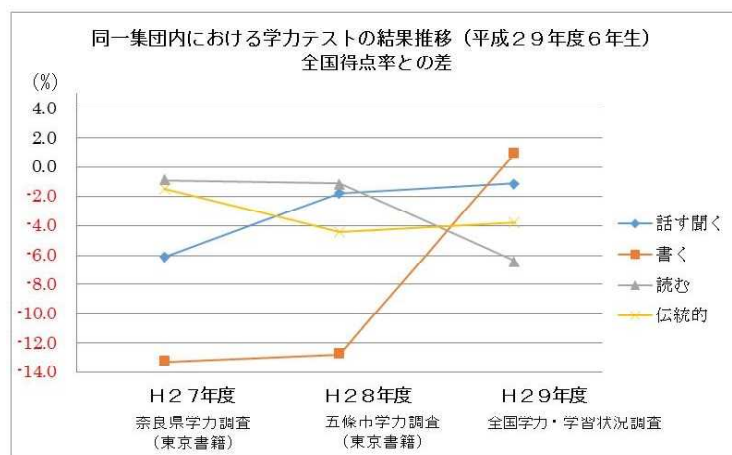
3. 取組の成果の把握・検証

◆全国学力・学習状況調査、奈良県学力・学習状況調査、五條市学力調査より

【平成29年度6年生】

- ・書く力や話す力、聞く力が向上した。(グラフ参照)
- ・「友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができますか。」
 - 1.3ポイント増加(平成28年度全国学テとの比較)
- ・学校の授業などで、自分の考えを他の人に説明したり、文章に書いたりすることが難しいと思いますか。(難しいと思わない児童の割合)
 - 11.0ポイント増加(平成28年度全国学テとの比較)

指導者は、話し合う必然性をもたせるため、児童が、具体的なゴールイメージをもてるよう言語活動を設定した。そのため児童は、それぞれの授業で自分の意見を生き生きと述べたり、他の人の意見をしっかり聞いたり、また自分の意見を作り上げるために色々な情報を収集し、整理して詳しく書くといった「主体的」に学ぶ経験を多くもつことができた。また、導入から終末までの流れを大切に、授業スタイルをつくることができた。そのため、以上のような力が身に付き、学力テストやアンケートに結果として表れたのではないかとと思われる。



また、11月に実施した奈良県国語教育研究会作成の国語学力診断テストの結果は、以下のとおりである。

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
本校平均点	74点	76点	64点	59点	68点	73点
奈良県平均点	85点	74点	62点	59点	73点	74点

各学年により多少のばらつきはあるが、6学年中3学年が県平均以上または、1学年が県平均と1ポイント差という結果になった。このことから、研究に取り組んだ成果が現れていると思われる。

読書活動については、本校の読書状況調査において、以下の成果が見られた。

◆学校独自のアンケートより

「読書は好きだ」 3.6ポイント増加（6月→12月）

「1日あたりの読書時間が1時間以上」 6ポイント増加（6月→12月）

4. 今後の課題

- ①読む力が、不足している。
- ②「主体的」「対話的」な学びは意識できたが、「深い」学びへの指導が不十分。
- ③読書量や読書の質の個人差が大きい。

① 3年間にわたり、「単元を貫く言語活動」を取り入れた国語科の授業を研究してきたが、読む力があまり身に付いていないのは、授業中において、それぞれの文章を細かく丁寧に読む機会が少なくなったことが原因の一つではないかと考えられる。本校が充実させている特別支援教育の視点から、児童に対する様々な説明を誰にでも分かりやすくしようとするあまり、説明する文章を読まなくても理解できるように具体物を提示したり、図示したりする手立てが過剰だったとの見方もあった。

そのため、朝の会や帰りの会で黙読・音読をする機会を設けたり、国語科で学習する教材を読む課題を家庭学習で出したりするなど、読みの基盤となる手立てを、授業以外でも更に取り組む必要があるということが分かった。

また、従来の黙読や音読指導では効果が出にくい児童を見つけるためにMIM（ミム：多層指導モデル）を全校児童に実施した。全ての学習領域に影響し得る早期の読み能力、特に特殊音節を含む語の正確で素早い読みに焦点を当てて調査することで、より良い手立てをより早くから講じることができると考えている。

② 本校の研修において「児童が進んで調べていた。」や「話し合うことで、新たな気づきがあった。」などの意見は度々出るが、学びの深さについて意識した議論は、あまりできなかった。今後、今回の研究の総括をする際、「主体的・対話的で深い学び」についての解釈を進めていく予定だが、その中で「深い」学びとは何かを文部科学省の資料を参考にしつつ、熟議を進めたい。

③ 読書量や読書の質には、まだまだ個人差が大きいのが現状である。低学年で読書が好きでよく本を読んでいた児童が、4年生以降読書量が減少する傾向にある。その手立てとして、たくさん本を備えた学級文庫を設置し、読書意欲を刺激するような内容のPOPを付ける。そうすることによって年齢や学年といった枠にとらわれず幅広く本を選ぶことができ、読書の質の向上につながると考える。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	奈良県五條市立五條中学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成28年度の全国学力・学習状況調査の結果から、国語Aにおける本校と全国平均との差は2.8ポイント、国語Bでは2.3ポイントと縮まってきた。しかし、数学Aでは11.6ポイント、数学Bでは10.4ポイントと、平成27年度と比べて全国平均を下回り、その差が広がった。

本校定期テストにおいては5教科の合計点が100点以下の生徒数が、平成25年度の15名から平成26・27年度には6名と減少し、平成28年度には5名と改善傾向にある。

また、すべての教科で言語活動の充実を図るため、卓上ホワイトボードを活用した話し合い活動を意図的に組み込んだ授業設計を行ったことで、生徒同士で学び合い、高め合う意識が定着してきた。

平成28年度は家庭での自学自習の習慣を身に付けさせるため、全学年で「自主学習ノート」に取り組み、全教師による指導体制を構築してきた。継続した取組の結果、「原則1日1ページの自主学習を行う → 学校に提出する → 点検」というサイクルが習慣付いてきた。

保護者を対象としたアンケートでは、「自主学習ノートは家庭での学習習慣を身に付けさせるために効果的である」の項目に対して、肯定的な回答が79.8%得られ、自主学習ノートの取組が有効であると捉えている保護者が非常に多かった。

その一方、課題として、以下の5点があげられる。

- (1) 言語活動の充実を基盤とした授業を行い、生徒を適切に評価することにつながる研究を深める必要がある。特に、各教科の特性に合わせた「振り返り」の学習活動をどのように展開することが適切であるか研修を深め、さらなる授業改善を図る必要がある。
- (2) 習熟度別学習の形態や自習ルームの設置等により、学習意欲の向上をさせることや学習環境の在り方について検討する。
- (3) よりよい自主学習ノートの在り方についての職員研修を実施し、継続した自主学習ノートの指導を行う。また、自主学習ノートの活性化を図るために校内コンテストを実施したり、強化週間を設けたりして、自主学習ノートの意欲を高める取組を検討する。

2. 協力校としての取組状況

(1) 授業力の向上

ホワイトボードを活用した授業を各教科で積極的に行い、「話し合い活動」を取り入れた言語活動の充実を図った。



ホワイトボードを活用した授業の様子

次期中学校学習指導要領総則には「生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること」とある。習得した知識を活用して新たな課題に取り組んだり、新たな思考に到達したりするために、ホワイトボードを活用した話し合い活動では、授業の終末に「個に返す」活動を行い、授業の前と後で自分の考えにどのような変容があったのかを確認する活動を行った。全ての授業に「見通し」と「振り返り」を取り入れ、生徒の理解がより定着する授業の構築を目指した。

(2) 学習内容の基礎・基本の定着

授業では、普段の授業の中で、基礎的・基本的な内容の確認問題を意識的に行っている。少ない範囲を指定し、その中から数問の確認問題を出題することでスモールステップを心がけ、低学力傾向の生徒を中心に「できた」という経験を積み重ねることを目的としている。基本的な内容の定着を図るとともに、成功体験によって自己肯定感を高め、学習意欲の向上につながることを期待して取り組んでいる。また、各定期テスト1週間前の放課後に補充学習（定着ステップ）を実施し、習熟度に応じた学習指導を行った。



定着ステップの様子

(3) 自主学習ノート

本校生徒は与えられた課題に対して受動的には学習するが、「自らすすんで」家庭学習をしていないことが課題である。そこで家庭での自学自習を促す手立てとして1日1ページを目安とする自主学習ノートを導入し、全校生徒で取り組んだ。主的な家庭学習を促した。また、自主学習ノートコンテストを開催し、全体の場で表彰を行うことで自主学習ノートに対する動機付けを図った。



自主学習ノートコンテストの様子

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 授業力の向上

○平成29年度の全国学力学習状況調査の生徒質問紙の結果より。（ ）内は全国平均。

①生徒の間で話し合う活動をよく行っていたと思いますか。 **本校 80.9% (81.8%)**

②学級やグループの中で、自分たちで課題を立てて、その解決に向けて情報を集め、話し合いながら整理して、発表するなどの学習活動に取り組んでいたと思いますか。

本校 80.9% (71.3%)

③自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思いますか。 **本校 80.9% (57.9%)**

④生徒の間で話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、自分の考えをしっかりと伝えていたと思いますか。 **本校 76.2% (73.5%)**

「話し合い活動」に関する質問項目に対して、本校生徒が肯定的な回答をしている割合が全国平均を上回る、もしくは同等の数値となっている。ホワイトボードを活用した「主体的・対話的な深い学び」を目指した取組を行うことによって、生徒の話し合い活動に対する意

識が向上していることがわかる。

⑤授業の中で目標（めあて・ねらい）が示されていたと思いますか。 本校 85.7% (87.8%)

⑥授業の最後に振り返る学習をよく行っていたと思いますか。 本校 71.4% (66.1%)

授業のはじめに、その授業のポイントとなるめあてやねらいを視覚的に示すことで、生徒は授業の「見通し」を立てることができ、主体的な授業の内容理解につながっている。

また、振り返る活動を「個に返す」ことを意識させることで、生徒が授業の内容を再確認し、学習内容の定着を図る「振り返り」を行うことができた。

(2) 基礎・基本の定着

基礎・基本の定着を図る取組によって、全国学力学習状況調査における解答率の底上げを行うことができた。

平成 25 年度から比べ、平均解答率は 20 ポイント上昇し、平成 29 年度は国語 A は全国平均解答率と比較して 2.4 ポイント下回り、国語 B では 2.8 ポイント上回った。数学 A においては全国平均解答率を 1.4 ポイント上回り、数学 B では全国平均解答率を 2.1 ポイント下回った。

(3) 自主学習ノートの取組

平成 29 年度の自主学習ノートの提出率は各学年とも 90% を超え、ほとんどの生徒が自主学習ノートに取り組み、教職員が連携を取り合いながら点検を行うというサイクルができあがってきた。本校生徒の家庭学習について、独自に行ったアンケート結果は以下の通りである。

①「学校の勉強以外で、平日にどれくらいの時間勉強をしていますか。」

	平成 28 年度	平成 29 年度	増減
ほとんどしない	23%	16%	-7%
1 時間以上勉強する	33%	46%	+13%

②「休日（土日・祝日）にどれくらいの時間勉強をしますか。」

	平成 28 年度	平成 29 年度	増減
ほとんどしない	45%	26%	-19%
1 時間以上勉強する	20%	42%	+22%

自主学習ノートの継続的な取組を行ったことで、生徒自身が課題を自覚して設定し、自ら進んで家庭学習を行う習慣が定着しつつあると考える。

4. 今後の課題

本校独自アンケートの「毎日の学習に熱心に取り組んでいる」の項目では、肯定的な回答が平成 28 年度は 72 ポイント、平成 29 年度は 74 ポイントであった。日々の自主学習ノートの取組が家庭学習習慣の定着に確実に結びついているが、「熱心に」家庭学習に取り組む姿勢を育むためには、生徒一人一人の更なる自己肯定感の向上につなげる必要がある。「毎日学習する」習慣を身に付けるとともに、その学習がどのように自分の将来につなげていくかといった生徒の目的意識を高め、さらに、保護者への共通理解を深めていくために、教師集団による励ましや支援を、キャリア教育等との結びつきも強めた取組への改善が必要である。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	奈良県御所市立大正小学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成28年度の6年生の全国学力・学習状況調査や4年生の県学力・学習状況調査、また、県の学力診断テスト結果において、一昨年度に比べ改善は見られるものの、全国平均あるいは県平均に比べ10点から15点下回っている。長文を読んで内容理解する力が特に弱い。また、自己肯定感や規範意識が低く、学習意欲も低い。さらに家庭学習の習慣が身に付いておらず、学習内容が定着しにくい状況にある。

2. 協力校の取組状況

上記の実態から、5つの重点課題を設定して取り組むことにした。

- ① 聴くスキルを身に付け、聴き合う国語科の授業モデル
- ② 学習規律・家庭学習の定着
- ③ 読解力向上
- ④ 学習意欲を高めるICTの活用や体験的な学習
- ⑤ 学習意欲につながる自尊感情の醸成

具体的には、これまで本校が取り組んできた業前10分2コマの「朝のび学習（計算、漢字、全校読書、読み聞かせ）」に継続して取り組むとともに、次の6点について研究を推進することにした。

①話し手に体を向ける聴き方のスキルを身に付ける。

全教員が「聴く」ことを意識しながら、学級指導や全校集会の場を通して、話し手に体を向け、傾きながら話を聴くことを指導する。



②国語科を中心に、聴き合い学び合える授業づくりを行う。

県の指導主事や外部講師を招聘し国語科の校内授業研（各学年1本）を行い、毎時のめあての確認、指導者の発問に対して自分の意見を書く場面、小グループで交流する場面、それを全体に伝え合う場面、学習を振り返る場面を入れた国語科の授業モデルを作り、各学級で実践する。また、「授業見せ合おうDAY」として研究授業を行った教員以外にも全て公開授業をし、「フィードバックシート」を作成し簡易研究討議をする。



③児童の興味・関心を高めるための授業内容、授業方法の工夫を行う。

地域の方や企業に協力を求めながら、体験的な学習を取り入れた授業を取り入れる。地域の老人クラブによる昔の遊びや暮らしの学習、地域探検、地域の特定野菜づくりや地場産業への見学、職場体験、体験学習など、児童が主体的に学習に取り組むことができる内容を授業に取り入れる。



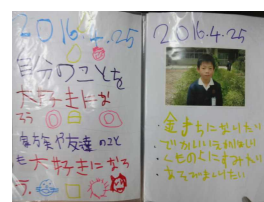
④児童のコンピューター活用能力を高める。

教員が授業でコンピューターを活用して指導するだけでなく、児童自らがインターネットを使って調べ、写真やグラフを貼り付けた新聞等の文書やプレゼンソフトを活用して発信できる技能を身に付けるために、指導計画を見直し、学年に応じたコンピューター活用能力を高めるよう系統立った指導を行う。プログラミング教育の導入。



⑤パーソナルポートフォリオ（宝物ファイル）に取り組み、学習意欲につながる自己肯定感を高める。

本年度も、全校体制でパーソナルポートフォリオに取り組む。個人ファイルを持たせ、自分の宝物（写真、賞状、テストなど）をファイリングしていく。また、家族や学級の児童からの評価（いいところ）も書いてもらい、同様にファイリングしていき、自己肯定感を高めていく。また、縦割り活動（遊びやそうじ）などを取り入れたり、委員会の活躍の場を増やして全校の前に児童が立つ機会を設けたりして、高学年の児童の責任を果たしたり、自信を高めたりすることで学習意欲につながる自己肯定感を高めようとする。



⑥スマイル教室（放課後学習）の実施

家庭学習の習慣の定着はもとより、学習をこなすこと自体が困難な児童が多い。昨年度までは各担任が個々に放課後の時間に学習日を設定し、少人数の児童の家庭学習を担任が指導する放課後学習会を開いていた。本年度より、2年生と5年生で外部ボランティア（大学生、退職教員等）を招いて、火曜日と金曜日に約1時間ずつ放課後学習を実施している。今までは担任の都合で実施できないこともあったが、計画的に実施できるようになった。児童の様子を見てみると、少しずつではあるが「解った」達成感を味わうことができ、効果が表れていると思われる。

3. 取組の成果の把握・検証

「聴く」指導や自己肯定感につながる取組の結果、全校朝会は最後まで静かな雰囲気の中、実施できるようになった。授業のチャイムを守るなどの規律も少しずつではあるができてきて、学校全体に落ち着きが見られるようになった。

【資料①】全国学力・学習状況調査の調査結果（6年生）

	H27全国平均との差	H28全国平均との差	H27と28の差	H29全国平均との差	H28と29の差
国語A	-16.3	-10.2	+6.1	-15.2	-5.0
国語B	-28.5	-13.8	+14.7	-21.5	-7.7
算数A	-20.4	-14.8	+5.6	-18.6	-3.8
算数B	-19.5	-13.4	+7.1	-16.9	-3.5

【資料②】奈良県学力・学習状況調査の調査結果（4年生）

	H28年県との差	H29年県との差	H28と29の差
国語	-12.8	-2.1	+10.7
算数	-13.3	+2.7	+15.0

【資料③】県学力診断テストの結果（前学年時との経年比較）

H29年度	国語					算数				
	H27県との差	H28県との差	H29県との差	H27~28の差	H28~H29の差	H27県との差	H28県との差	H29県との差	H27~28の差	H28~H29の差
1年			+6.2					-7.9		
2年		-2.7	-1.0		+1.7		-9.2	-7.8		+1.4
3年	-10.2	-10.2	-11.9	0	-1.7	-10.3	-4.1	-12.9	+6.2	-8.8
4年	+8.4	+9.2	+0.8	+0.8	-8.4	+1.4	+3.4	+4.1	+2.0	+0.7
5年	-16.9	-5.6	-7.6	+11.3	-2.0	-24.2	-2.0	-7.3	+22.2	-5.3
6年	-18.8	-20.1	-12.2	-1.3	+8.1	-16.1	-15.9	-17.6	+0.2	-1.7

学力向上の取組は一昨年度から進めており、今年度の4月に行った全国学力・学習状況調査結果に成果としてみることができなかった。資料①のとおり、全国の平均点に比べて大きく下回っているが、一昨年度に比べると一定の成果が見られる。また、奈良県学力・学習状況調査では、資料②のように著しく成績がアップしており、本校の場合、年度ごとや学年によっての変動が大きく、取組の成果とは一概に言えない部分があるが、一昨年度に比べてその差は縮まっている。

また、資料③は、毎年11月に実施している県学力診断テストの結果を3年間の経年で比較した表である。本校の結果は、県の平均値とは大きな開きがある。特に高学年については顕著である。しかし、昨年度は前年度に比べ、県との差が縮まっている学年が多かった。2年間の取組を通して国語で県平均との差が全体的に少し縮まったように思われる。「聴く」ことをテーマに全校体制で取り組んだ結果、一定の成果として考えることができる。

4. 今後の課題

「聴く」ことをテーマに全校体制で取り組んだ結果、児童が主体的に学習に取り組む意欲を十分高めることはできていない。これは、授業者が教授型の一斉授業から脱却できずにいることが一因であると考えられる。今後、児童同士が学び合うスタイルの授業形態を構築していく必要がある。

また、学習規律と学力との関係も考えていく必要がある。学習規律を身に付けた児童を育てるための学級経営が求められる。

下記の表は、昨年度と今年度における全国学力・学習状況調査の児童質問紙調査の本校の結果である。この結果に顕著に表れているように、本校の児童は自己肯定感や規範意識が低く、学習意欲も低い。家庭学習の習慣が身に付いておらず、学習内容が定着しにくい状況にある。

全国学力・学習状況調査の児童質問紙による調査 質 問 内 容	全国平均との比較	
	H28	H29
朝食を毎日食べていますか	-14.7	-12.0
家で、自分で計画を立てて勉強をしていますか	-11.0	-25.7
家で、学校の宿題をしていますか	-23.7	-8.1
普段、学校の授業以外の勉強を1時間以上していますか	-18.2	-35.8
家で、学校の授業の予習をしていますか	-14.2	-18.6
普段、2時間以上ゲームをしていますか	+24.6	+38.3
自分には、よいところがあると思いますか	-5.5	-23.9
将来の夢や目標を持っていますか	-26.7	-18.5
人の役に立つ人間になりたいと思いますか	-13.3	-19.0

これからも学校として家庭に協力を願い、基本的な生活習慣の改善、また様々な場面や角度から活躍の場を増やしたり全校や学級の前に児童が立つ機会を設けたり、スマイル教室（放課後学習）を継続したりすることによって「自分もやればできる」という自信を高めることで、学習意欲につながる自己肯定感を高めたい。

最後に、本校にとって家庭学習が十分ではないことが大きな課題である。家庭学習が単に反復練習して定着を図る内容の宿題が中心で、自分で復習や予習をするなどの自主学習まで指導できていないことが課題として挙げられる。系統立った家庭学習の手引きを示し、家庭にも協力を得ながら、児童が主体的に取り組める家庭学習の定着を図る必要がある。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	奈良県御所市立葛上中学校
------	--------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

平成26年度からの3年間の取り組み中で、授業で獲得した知識や学習内容の定着に向けては、一定の成果が出てきている。また、問題解決的な授業のあり方については「葛上中学校スタイル」（問題解決的な学習過程）を設定し、グループ学習などを活用した問題解決的な学習活動は毎時間確保する必要はないと提案した。その上で、各教科の単元を見通して、計画的に問題解決的な学習活動に重点を置いた授業を行うように本校では総括している。

学習過程の中で、『授業の初めに授業の目標（めあて・ねらい）を示している』の項目で肯定的に答えている生徒の割合は87%を超えている。しかし、『授業の初めに授業の目標（めあて・ねらい）が示されることで授業がわかりやすくなっていると思う。』の項目で、肯定的に答えている生徒の割合は全体で58%と低くなっている。また、『すべての生徒が、授業のはじめに提示された課題に対して活動をしている。』の項目で肯定的に答えている教員の割合が50%に満たない。このことから、授業の初めに目標（めあて・ねらい）は提示されているが、それが生徒の意欲的な学習活動とは十分につながない現状が見られる。

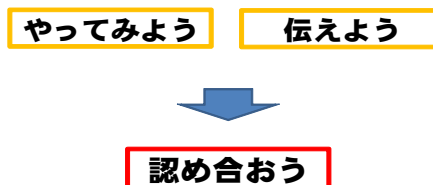
さらに、『授業の終わりに授業の振り返りが行われていると思う。』の項目で、肯定的に答えている生徒の割合は全体で55%で、昨年度よりは改善されているが、まだ十分ではない。また、『すべての生徒が、1時間ごとに自分が学んだ事のふりかえりをノートなどに記入している。』の項目で肯定的に答えている教員の割合が50%に満たない。このことから、授業の初めに提示される目標（めあて・ねらい）が振り返りと連動していないという課題も見えてきた。ただ、こういったアンケートに対して教員の割合が低い要因の1つとして、これまで以上に『めあて』や『振り返り』に対しての教員の意識は高くなってきたが、具体的にどうすれば良いのかがわからないで悩んでいることが考えられる。

2. 協力校としての取組状況

【本年度の重点目標】

昨年度の重点目標は「自分でやってみようという気持ちを育てる。」「一生懸命やった結果、失敗しても良いんだと思える力をつける。」「まわりの目を気にせず、自分の意見を伝えられる力をつける。」「自分の考えをまとめて表現する力をつける。」「一人ひとりの成長を、まわりで支えることができる力をつける。」の5項目であった。しかし、昨年度より、校区にある2

今年度の重点目標



小学校と全国・県学力学習状況調査の結果分析を行う中で、2小1中とも、国語の表現力のポイントが低い現状があった。また、年度当初行う、中学校区人権教育研究会総会において、児童生徒の様子との交流を行う中で、少人数がゆえの、きめ細やかな指導はできているが、教師側がてをかけすぎて、子どもの意見や思いを先取りしているのではないかとの意見が交わされる中、年度の重点目標を、教職員や生徒たちにも分かりやすい、重点目標に変更した。そのことを全校集会で生徒たちに伝えるとともに、教室にも掲示をして、教職員や生徒たちに意識してもらうことにした。

【葛上中学校授業スタイル】

一昨年度より行っている『問題解決的な授業の学習過程』の活用により、〔解決活動〕の時間を充実させることができた。毎時間、グループ学習の時間がとれるわけではないが、とるときには時間をかけてグループ学習の時間を確保できている。話し合いも深まってきている。また、『振り返り』に関しては、先進校視察なども行いながら、『まとめ』と『振り返り』のちがいについての話し合いを教職員間で行った。『まとめ』ではなく『振り返り』を意識した授業を行うとともに、生徒に対しても『振り返り』活動を意識させるようにした。



【自主的な学習活動】

4年目になる形成テストや学力補充の時間、夏休み期間中のハッピーウィークなど学力向上に関わる取組は定着してきた。そういう活動の成果が出てくる中、昨年度より生徒会の中央委員会が中心となって、後輩に学習の仕方をアドバイスしたり、悩みを聞くことなどを目的として、定期テスト前の3学年全体で行う学習会も企画開催した。学年の垣根を越えて交流することでコミュニケーション能力の向上にも役立った。



【コミュニケーション能力の育成】

前述のように本校の生徒は「表現力」が弱いという結果より、本年度夏期休業中に職員研修で奈良県立図書情報館 乾さんを講師として「ビブリオバトル」の研修を行った。本研修で「ビブリオバトル」は表現力の向上を主目的に置くのではなく、「本を通して、人を知り、人を通して本を知る。」というご示唆を頂いた。本校の重点目標「やってみよう」「伝え合おう」そして、「認め合おう」の目標にも合致しているということで、本年3学期に全校で「ビブリオバトル」を実施する。その副産物としてコミュニケーション能力が少しでも育成できればと考える。

【授業参観チェックシート】

学期に1回、計3回、教員の授業力向上を旨として研究授業を実施した。その前後の2週間を公開授業週間として、全教員が公開授業をおこなった。公開授業の日と時間を計画し、空き時間の教職員が「授業参観チェックシート」を持って参観し、授業終了後、意見交換や感想を交流し合うようにした。その「授業参観チェックシート」は学力向上の取組の先進校である、五條市立五條中学校の「授業参観チェックシート」を参考にし、本校の状況に応じた内容に変更した。

【自主学習支援ノート改善】

中学校では小学校と比べて自分で学習する習慣を身につけることが大切であると考える。宿題だけではなく、分からないことを自分で調べたり、授業で習ったことを自

分でまとめたり、やり直したりすることができるようになることも、学力を向上させるためには大切である。自主学習支援ノートの取組については、昨年度は教員・生徒がともに十分に活用し切れていない現状があった。生徒の意見も取り入れながら、自主学習支援ノートの内容の改善と有効活用するためのシステムづくりを検討し、学習習慣の定着に向けて、日々の学習開始時間や学習時間を記入できるような自主学習支援ノートに発展させたものを今年度から活用している。そのことにより、提出率が高くなった。

3. 取組の成果の把握・検証

形成テストの活用により、昨年に引き続き、定期テストの5教科の得点で500点満点中200点を下回る生徒の割合は、15%を下回っており、500点満点中100点を下回る生徒は、学年によっては1人もいないか、いてもその割合は4%程度である。

本年度2月に実施した学力に関するアンケート結果において、『授業の終わりに授業の振り返りが行われていると思う。』の項目で肯定的に答えている生徒は飛躍的に増えた。(55%→71.8%)

また、『授業の初めに授業の目標(めあて・ねらい)が示されることで授業がわかりやすくなっていると思う。』の項目においても同様のことが言える。(58%→76.9%)『グループ学習のある授業はわかりやすい。』の項目で、肯定的に答えている生徒の割合は昨年度、全体で50%程度であったが、本年10月に行ったアンケート結果では64%に上昇している。そのことから、人間関係づくりが、ある程度築かれた結果だと考える。

中学校区(小学校2校・中学校1校)で奈良県学力・学習状況調査や全国学力・学習状況調査の結果の交流は定着した。来年度より、国・県の学力学習状況調査の結果が早く手元に届くということで、夏期休業中に国と県の結果を集中して交流が出来る。また、そのことをしっかりと行うことで、校区の課題が少しずつ見えてきている。

また、本年第3学年で実施した全国学力学習状況調査とその生徒たちが、第1学年で受けた奈良県学力学習状況調査の経年比較をしてみると、国語Aでは+4.5ポイント、国語Bでは+5.6ポイント、数学Aでは+4.1ポイント、数学Bでは±0でありました。しかし、国や県の平均を若干上回っているだけで、まだまだ、本校の取組は道半ばといわざるをえません。

4. 今後の課題

中学校区で学力・学習状況調査の結果の交流を行うことで、校区の課題が少しずつ見えてきているが、見えてきた課題に対する取組の検討及び交流は、まだできていない。今後、合同の教科研究授業などを行いながら、課題の克服に努めていきたい。

また、グループ学習のある授業がよりわかりやすいものとなるように、できるだけ早い時期に、グループ学習をおこなっていただくの、コミュニケーション能力や人間関係を十分育てていくことが必要と考える。また、今後、グループで取り組む必然性や、興味関心をもつ課題を設定し、協力して取り組む姿勢を授業の中でも育てていきたい。(毎時間取り組む必要はないと考えるし、無理にグループ学習にしばられる必要もないと考える。)

「自主学習支援ノート」と「自主学習ノート」に関しては生徒たちは「自主学習支援ノート」と「自主学習ノート」の2冊を持つことになるので、どちらか一方を忘れていたりして不便さを感じていた。そこで、本年11月に開催された五條市立五條中学校の学力向上研究大会で、生徒の「自主学習支援ノート」と「自主学習ノート」が1冊になっていたのを参考にし、来年度からは定期的家庭訪問時に家庭学習の意義や「自主学習ノート」の使い方(保護者・生徒向け)を配布し、「自主学習ノート」に家庭学習の学習時間を記載するプリントを添付することにする。

最後に本年度、研究大会を開催し、奈良教育大学教授 小柳先生から「深い学び」についてのご示唆を頂き、次年度からは「深い学び」について考察を深めていかなければならない。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の
重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	宇陀市立榛原小学校
------	-----------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

昨年度は、「ユニバーサルデザインの授業づくり」を活用しながら、算数科での主体的・対話的な深い学び（アクティブ・ラーニング）の視点を取り入れた授業づくりの研究を行ってきた。その中で、特に大切にしたのは、「算数が好き」と言える子、「友達と一緒に勉強することが楽しい」と思える子にすることである。

授業研究を中心にして、児童が主体的な学習に取り組み、ペア学習やグループ学習等を行いながら、算数を好きになることで学力を向上させるということを目指してきた。昨年度1年間の取組の成果として、児童アンケートの結果から、すべての学年において算数が好きになった生徒が増えた。しかし、「算数好き」は増えたが、学力テストの点数は伸びず、A問題では前年度を下回る結果となった。

そこで、平成29年度においては、「全ての子どもが主体的に学び合う授業の創造」の研究テーマに、「基礎基本の力の充実と、主体的・対話的な学びの授業づくり」の副題を設定した。学び合いによる授業づくりと並行して、それに必要な基礎・基本の力を付けることも大切にしながら実践を進めることとなった。そのため、家庭学習の充実にも力を入れることにした。

2. 協力校としての取組状況

昨年度は、低・中・高学年ごとに授業部会をおき、授業研究を中心にした研究体制であったが、今年度は並行して3つの専門部会（調査部会、評価部会、家庭学習部会）をおいた。そして、それぞれの部会に低・中・高学年の教員が入るようにした。

(1) 授業部会の取組

これまでから、「問題」→「めあて」→「見通し」→「自力解決」→「考え方の交流」→「まとめ」といった学習過程を児童にも意識させながら授業を進めてきた。さらに、自分の考え



写真②

に自信をもったり、様々な

考え方を交流したり、正解を確かめたりするために、ペア

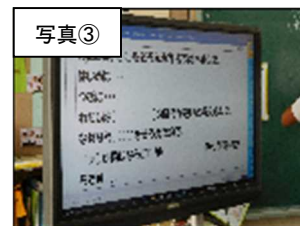
学習（写真①、②）の形を積極的に取り入れてきた。それによっ



写真①

て、みんなの前で発表できる児童が増えてきた。

また、掲示資料や ICT 機器を活用し（写真③）、視覚化することにより児童の学習意欲の向上や理解の深まりを促すことができた。さらに、これまでの研究により創り上げてきたユニバーサルデザインシート（UDシート）により、言葉かけや支援を要する児童に対する対応にも配慮した。



（2） 専門部会の取組

調査部会では、昨年度に引き継ぎアンケート調査を行い、児童の意識の実態と取組後の変化を把握することにより、研究の成果を検証しようと考えた。7月のアンケートの結果から、今年度の取組について提案をした。

評価部会では、学習の終わりの「振り返り（自己評価）」について取り組んだ。これまでの授業研究の成果として、導入部での「めあて」の確認（掲示）は定着している。しかし、学習の終わりの「振り返り」については、個々の教師によってその方法や扱い方に差が見られる。そこで、「振り返り」の意味を、①児童がその時間の学習をどれだけ理解したかを個々に把握する、②その時間の「めあて」が適切であったかどうかを判断する、の2つと共通理解し、学習活動の中に「めあて」と「振り返り」を必ず取り入れることを確認した。

家庭学習部会では、まずは宿題をきちんとさせるように取り組む一方で、学習意欲の向上を目指した自主学習にも取り組むこととした。実態交流や調査部会のアンケートの結果から、意欲的に自主学習をする児童もいれば、宿題さえ出来ていない児童もいることや家に帰ってからの学習の時間帯もさまざまであるなどの実態が分かったためである。学年の実態に合わせた自主学習の方法を4月に配布したが、なかなか浸透しなかったため、2学期からは再度学年だより等で家庭に周知するとともに、自主学習日を土曜日、日曜日として取り組むことにした。

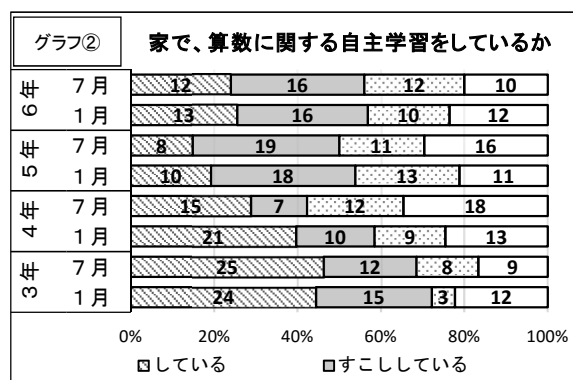
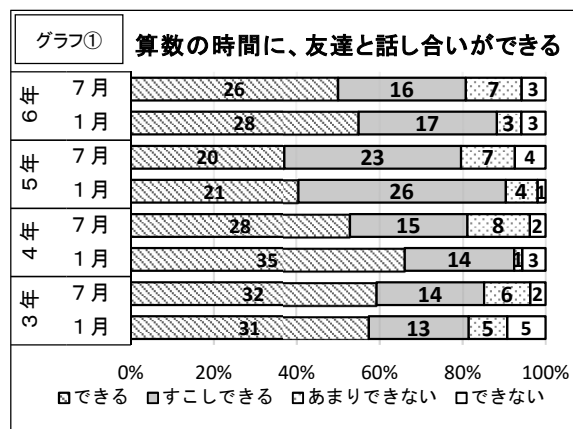
3. 取組の成果の把握・検証

（1） 授業部会

タブレット等のICT機器の活用により、授業の流れに沿った資料を効果的に示すことができた。また、問題解決の方法を自分なりに考え、表現しようとする意欲や聞こうとする態度が高まった。（グラフ①）全体で発表しにくい児童もペアやグループなら自分の意見が言えるようになり、対話的な学習の力が向上したと言える。

（2） 専門部会

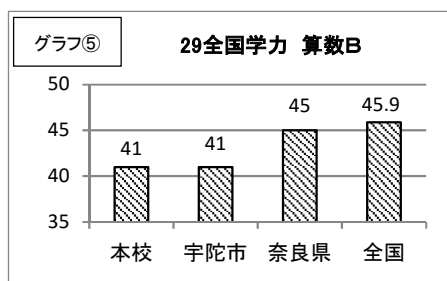
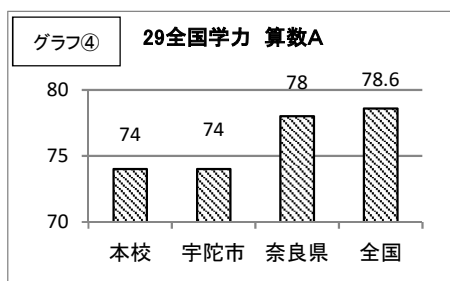
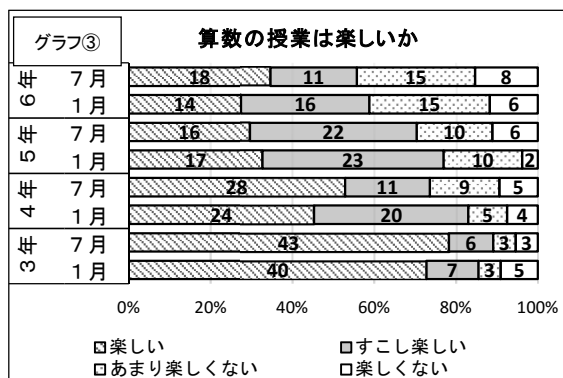
教師も児童もその日の授業を振り返る習慣が付いた。振り返りをする中で、児童自身が学習を深めることにつながるとともに、担任が児童一人一人のつまづきや理解度を把握することで次の学習にいかすことができた。また、



友達の振り返りの発表を聞くことで、さらに学習の定着が図れた。

家庭での自主学習については、学期に 100 ページ以上などの具体的な目標設定をして取り組む児童もいた。手本になるような自主学習ノートを掲示することで他の児童の参考になったり、意欲向上につながったりしたためか、自主学習をする児童は増加した。(グラフ②)

調査部会が実施した算数アンケートでは、3年生を除き、「算数が楽しい。」と答える児童は増加した。(グラフ③)しかし、全国、県、市の学力学習状況調査の結果や県の算数教育研究会が実施している調査の結果では、本校児童の得点の向上は見られなかった。(グラフ④、⑤)



4. 今後の課題

(1) 授業部会

- ・ 全体の場合での発表（共有や練り上げ）の際、話形を示したり友達の良い発表をモデリングしたりすることにより、算数的な用語も意識した言語能力を養っていく必要がある。
- ・ 児童の学び合い活動を効果的なものとするため、指導者は単元の学習の流れの中に本時の学習を位置付け、適切なねらいを設定する必要がある。
- ・ 児童の意欲が高まってきているが、学力調査の結果に表れてこない。本校の研究は、児童が算数好きになることで学力を上げていくことを目指すものであるが、同時に学力テスト等の結果を出すことでさらに意欲をもって学習が進められるようにするため、実践を重ねていく。

(2) 専門部会

- ・ 学習の振り返りをさせる際に、どのような方法が有効かについての実践が必要である。高学年になるほど学習内容が増えるので、振り返りの時間を短くしたいが、単なる記号や数値で示すだけではつまずきの内容が把握できない。文章表記の場合、時間がかかりすぎたりする。振り返りの内容を充実させるためには、教師の適切な視点の与え方や児童の表現力の向上に研究の余地がある。
- ・ 基礎基本の定着のためには反復練習が必要であるため、学校でのこつこつタイム（朝学習）の充実とあわせて、家での宿題の取り組み方などの学習習慣づくりに力を注がなければならないと考える。今年度は自主学習を土曜日と日曜日と設定し、自主学習の手引きの作成も学年独自に進めた。今後は、学校としての家庭学習のあり方（宿題、自主学習の位置付けなど）を統一し、資料等も作成して児童や保護者に周知するようにしていく。

(様式3)

「主体的・対話的で深い学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（小・中学校）」

平成29年度委託事業完了報告書

【協力校】

都道府県名	奈良県	番号	29
-------	-----	----	----

協力校名	奈良県宇陀市立菟田野中学校
------	---------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 当初の課題

- ①基礎基本が定着しておらず低学力傾向にある
- ②授業規律が定着しておらず集中できない
- ③学習的な競争力に乏しい
- ④家庭学習の習慣がついていない
- ⑤読む力・書く力・話す力が低い傾向にある
- ⑥継続性がなく粘りが無い（難しい問題にあたると諦めてしまう傾向が強い）
- ⑦自分一人でできず、直ぐ誰かに頼ってしまう等の傾向にある

2. 協力校としての取組状況

今年度、学力向上に関する校内研修は、4回実施。4回の研修で「共通理解し学んだこと」学力向上委員会を組織し、教科横断的に授業研究・授業改善に取り組み教員の意識向上を図った。また、市・県・国の学力・学習状況調査を分析し、授業や家庭学習の改善を委員会で検討し実行した。

(1) 授業に関して

各教室に板書の際に使うカードとして、「今日の目標」「今日のまとめ」「重要」「ここがポイント」「次時の連絡」を置いた。授業を始める時には、必ず、本時の目標を提示することをすべての教科で徹底している。生徒が、その1時間で何を学ぶのか、見通しを持った学習活動を進められるようにということを目的としている。目標と合わせて1時間の流れ、これだけはという内容を伝えておくことが大切だと考える。また、板書は、学習内容が分かるように、基本1時間分を1枚に収めるよう心がけている。ノートを取るのに必死だった生徒、きれいに書くことに必死になり先生の話聞いていない生徒には、今やらなければならないことに集中させることが出来るようになったと思う。教師側の心がけ、工夫1つで何が大事なのかを生徒に伝えることができ、聞かせることも出来るようになった。

五教科では、小テストを多く取り入れるようになった。目標を達成できたのかを生徒自身、また教師自身が把握するのに効果を上げている。「できた」「分かった」という自信が、学習意欲を向上させたり持続させたりする効果があると感じている。

「言語活動を通して考えさせる授業を行う」ということに関しても、引き続き各教科で意識的に計画の中に組み入れている。思考力・判断力・表現力を育むためにも、研究授業を行う時に週単位で或いは単元で取り入れて行い、全体交流が出来るようにしている。日々の学習活動の中では、英語科と1年の数学科と国語科が活発に取り入れている。1年生では、『数学班・国語班』というグループを作り、頻繁に教え合いや伝える活動をしている。数学班は得意・不得意や積極性等を考慮し全体のバランスを考え固定としている。国語班は固定を原則とせず、やや柔軟に班を決定している。また、全学年英語科では、毎時間班活動がある。班は固定していない。内容は単語の練習が多

いが、毎回同じではなく変化を加えて生徒が飽きないような工夫をしている。

(2) 家庭学習

積極的に、自主的に、計画的に家庭学習をしている生徒が少ないのが現状である。そこで、せめて宿題という形で課題を与え、家で少しでも学習させたいと考えている。しかし、朝、回収されるまでに時間があると、家でやらずに登校してからとりあえず体裁を整えて出せばよいと、じっくり考えない生徒がいたり、友達のを写して提出する生徒がいたりして、思うような成果が見られないという状態が昨年度から続いていた。5月の研修で、朝の会で必ず提出させる形をとると決めて指導をした結果、家でして来る生徒が増加した。なかでも、**成績中位層が家でするようになり**、全体の底上げを考えた時には、大きな進歩である。朝宿題を出せなかった場合は、放課後残って必ずやり切るまで指導している。クラス担任、教科担任、部活動顧問から同じように「部活動は宿題を終えてから参加する」という約束を伝えたことが、家でやるようになった大きな要因と捉えている。

(3) その他（学年の取り組み）

現3年生は、1年生の時から終わりの会で数学プリントを実施している。この学年は数学に対する苦手意識が特に高く、1年時の県数学テストでは、平均点が県平均よりも20点近くも低いという状態であった。毎日数学に触れさせる意味もあり継続して学年の先生手作りのプリントを、5問程度と少なめにして、正解するまで帰れないという約束で実施している。終わりの会には学年所属の教師がすべて入り込み、遅れている生徒に教え、また早く出来た生徒も友達に教えている。現在は達成度別プリントで、5教科の学習をしているが、定期テスト前などには、数学の基本の見直しを続けている。

現2年生は、終わりの会で1分間スピーチを行っている。元気の良い学年で、人前での発表も数多くこなしている生徒たちではあるが、自分の感じたこと、思ったことを分かりやすくまとめて話すということに関しては、まだまだこれから伸ばしていきたいと考えている。そのトレーニングの1つとして1分間にまとめて話すという取組である。

現1年生は、終わりの会終了後、毎日放課後学習を行っている。班活動を有効に活用し、教え合い学習が定着できるよう進めている。学年所属の教師がすべて入り込み、サポートをしている。

その他には、9月から3月の入試前までの毎週土曜日に『うたの土曜塾』を実施している。3年生が主体となっているが、全3年生の85%が出席し、卒業生の大学生や教員OBなど7名の講師に指導をして頂いている。何より生徒が積極的で、内容の深い土曜学習を開催出来ている。



話し合い活動（理科）



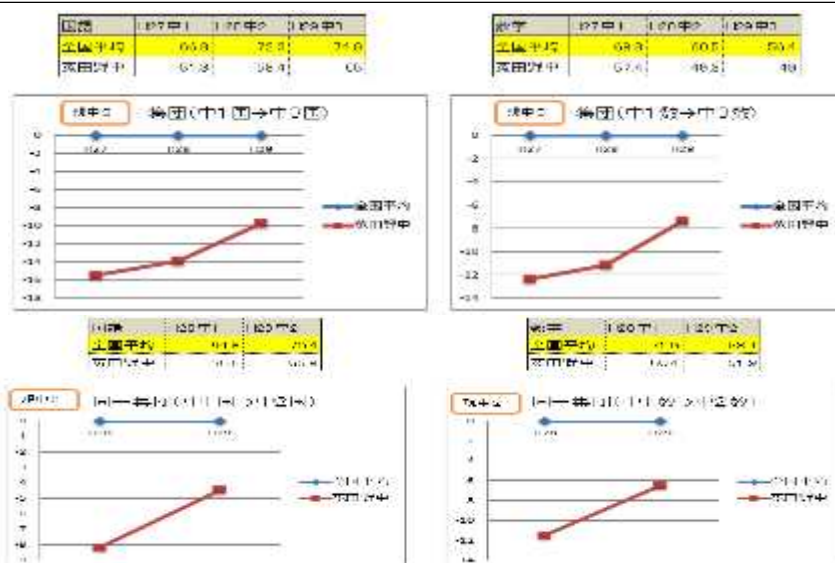
グループ代表の発表



授業研究

3. 取組の成果の把握・検証
全ての学年が右上がり傾向を示している。

全国（中3）奈良県（中1）宇陀市（中2）学力調査の結果（全国平均との差）同一集団の推移



全国（中3）奈良県（中1）宇陀市（中2）学力調査の結果（全国平均との差）



4. 今後の課題

- (1) 全体的に落ち着いた環境の中で、学校生活（学習活動）を送れるようになり、評価をしている。昨年度から、全職員参加の校内研修を重ね**全職員が同じ方向を向いて進めるようになってきたものの、学力向上という点においては、まだまだ道半ばで改善が必要**なところが多々あり、本校生徒が「生きる力」を身につけ、夢に向かって自分の力で前進できるよう、さらに活発な活動を進めていくことが求められている。
- (2) **目標を短期間に設定し、その都度課題検証をすすめる。課題を放置しない。**
 幼小中の**合同研修**を通し、**系統立てた学習**を考慮し指導方法の見直しや規範意識の醸成を進めたい。
- (3) 学校でできること、家でしなければならないことを明らかにし、全面的な家庭の協力を得る。家庭学習について、課題の与え方は偏っていないか、短期間で行わせるのか、1つの単元

が終わってから行わせるのか、長期休業中にさせるのが適当か等を検討する。また、教科としての縦のつながり、学級・学年など横のつながりをもたせる取組をさらにすすめることが必要と捉えている。次年度はキーワードを『好き』と定め活動を進めたい。